講武地区遺跡分布調査報告書1

1987年3月

島根県 鹿島町教育委員会

講武地区遺跡分布調査報告書1

序

鹿島町講武地区は、数多くの遺跡があるところとして知られておりますが、この地区で圃場整備事業が計画され、すでに一部は着工をみております。こうしたなかで、遺跡の範囲を確認して、後世に正確な記録を残すため、国庫補助事業として今年度から講武地区遺跡分布調査を実施することになりました。

今年度は、南講武草田遺跡、南講武大日遺跡の範囲確認に重点をおき、両遺跡ともかなりの規模と内容を有するものであることがわかりました。

南講武草田遺跡では、度重なる洪水にもめげず、講武を美田とするために営々と努力を重ねた先人の足跡が地下に残されており、また南講武大日遺跡では、農閑期に玉作りを行なうなど、寸暇をおしんで働く祖先の姿がしのばれる調査結果をえています。こうした先人の労苦を知ることで、私達の明日への展望を開きたいものと思います。

終わりになりましたが、調査にあたってご指導、ご協力いただいた島根県教育委員会、土地所有者および近隣の方々にあつくお礼申しあげて、報告書発刊のごあいさつとさせていただきます。

昭和62年3月

鹿島町教育委員会

教育長　加　納　益　雄

例　　言

1．本書は、鹿島町教育委員会が昭和61年度に国庫補助事業として実施した講武地区遺跡分布調査の報告書である。

2．調査は、南講武草田遺跡、南講武大日遺跡の範囲確認のための発掘調査に主眼をおき、あわせて周辺の遺跡についての資料収集を行なった。

3．遺跡の所在地は、南講武草田遺跡が八束郡鹿島町大字南講武663－1他、南講武大日遺跡が八束郡鹿島町大字南講武182－3他である。

4．調査は昭和61年10月7日から12月9日まで実施した。

5．調査体制は以下のとおりである。

事　務　局　井ノ口隆義（鹿島町教育委員会教育次長）
　　曽田　稔　（　　同　　社会教育主事）
調　査　員　赤沢秀則　（　　同　　主事補）
調査指導　勝部　昭　（安来市立第一中学校教諭）
　　宮沢明久　（島根県教育庁文化課文化財保護主事）
作　業　員　宮廻武男、安達勝丸、古瀬智恵子、古瀬玉子、曽田芳子、石橋静枝
遺物整理員　石橋静枝、石橋積枝、古瀬玉子、松山智弘、丹羽野輝子

6．調査にあたっては、土地所有者の各位から終始多大な協力を得た。記して謝意を表したい。

7．南講武大日遺跡の黒色土の堆積については、島根大学理学部物理学科伊藤晴明教授、時枝克安助教授に分析をいただいたうえ、玉稿をいただいた。また、島根県教育庁文化課松本岩雄氏からは助言を、見学会については、鹿島町立東小学校山中健次教頭、安達昂教諭に協力をいただいた。あわせて感謝の意を表したい。

目　　次

序

Ⅰ　調査の経過……1

Ⅱ　位置と歴史的環境……2

Ⅲ　調査の概要……4

1．南講武草田遺跡……5

第1調査区……6

第2調査区……6

第3調査区……7

第4調査区……7

第5調査区……8

第6調査区……8

第7調査区……8

第8調査区……9

南講武草田遺跡出土遺物……10

2．南講武大日遺跡……14

第1調査区……15

第2調査区……16

第3調査区……16

第4調査区……17

第5調査区……18

第6調査区……22

第7調査区……23

第8調査区……23

南講武大日遺跡出土遺物……25

Ⅳ　周辺の遺跡……29

中尾谷山古墳群……29

清水の奥横穴群……31

中尾谷山横穴……31

南講武小廻遺跡……31

Ⅴ　小　　結……33

特別寄稿……36

Ⅰ．調 査 の 経 過

鹿島町講武地区は、島根半島有数の水稲耕作地であり、鹿島町全体の水田面積270haのうち講武地内は183haを占めている。このうちの約半分については昭和30年代に区画整理事業が行なわれたが、依然として排水は不良のうえ、道水路網は不備であり、同地においての圃場整備事業の実施は関係者の強い要望であった。こうした要望を受けて昭和59年度から講武地区県営圃場整備事業が133haを対象として開始されている。

一方、この事業計画地域内には、講武川流域条里制遺構をはじめとする遺跡が存在しているため、関係者の度重なる協議を経て、昭和59年度から以下のように発掘調査を実施してきている。

名分塚田遺跡第１次調査（昭和60年１月）

名分湯戸遺跡群発掘調査（昭和61年２～３月）

名分塚田遺跡第２次調査（昭和61年６～７月）

講武地区遺跡分布調査は、国庫補助事業として、近い将来圃場整備事業の実施されるこの地区について、事業実施前に遺跡の分布を確認しようとするものである。61年度は、講武地区のうち、南側丘陵沿いを対象として、南講武草田遺跡、南講武大日遺跡の範囲確認に主眼をおいて実施した。

調査は、昭和61年10月７日から12月９日まで実施した。調査の結果、南講武草田遺跡では水田下に弥生時代後期から古墳時代前期の包含層がかなり広い範囲にわたって広がっていることが判明し、南講武大日遺跡では、講武盆地西半を見下ろす緩斜面上に、弥生時代から中世にまで至る集落が営まれていたことがわかった。

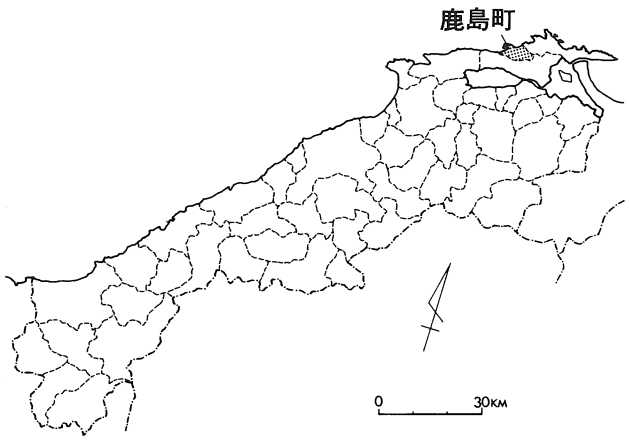


図１　鹿島町位置図

II．位置と歴史的環境

島根半島のほぼ中ほどに位置する講武盆地は、面積約140haの水田を有しており、半島部では持田・川津平野とならんで広い耕地面積を有する。この盆地は、谷奥から流れ出す講武川によって作られた肥沃な地味により、古くから水稲耕作地として格好の条件を備えていたものと考えられる。

南講武草田遺跡は、この盆地のほぼ中ほど、南側の丘陵の谷あいから流れ出す土砂によって堆積した小さな扇状地上に位置している。また、南講武大日遺跡は、講武盆地の西半を見下ろすことのできる緩斜面上に位置する。

この盆地をめぐっては、縄文時代早期末から中期にかけての佐太講武貝塚[(1)]が知られており、これは現在の佐陀川沿いに開けていた潟湖（『出雲国風土記』にいうところの「佐陀水海（さだのみづうみ）」、「恵曇陂（えとものつつみ）」の前身）をそれぞれ南と西にひかえた立地であり、こうした潟湖からヤマトシジミなどの魚介類を採集し、周辺の山野に鳥獣、堅果類を求めていたものと思われる。

弥生時代前期後半には、この盆地西端に佐太前遺跡[(2)]が成立する。この遺跡は、かなりの集落址と考えられ、その存続期間も長い。この集落を母集落として講武盆地の開発が行なわれたものと考えられる。さらにこの時代には、この盆地から少し離れるが、「恵曇陂」の南岸の山ふところに銅鐸2、銅剣6を埋納した志谷奥遺跡[(3)]がある。講武盆地内に目を転ずると、弥生時代中期の遺物を出土した名分塚田遺跡[(4)]、四隅突出型墳丘墓の可能性のある南講武小廻遺跡[(5)]が知られている。

古墳時代には講武盆地をめぐる丘陵上に数多くの古墳が築造されており、この時代までに盆地内の開発がかなり進んだことを示していよう。特に名分地域には、奥才古墳群[(6)]、鵜難山古墳群[(7)]、名分丸山古墳群[(8)]など前半期にさかのぼる群集墳が知られている。その他、時期などは不明であるが、径40m前後の古墳も知られてきている。古墳時代後期には、講武盆地のほぼ中ほどの北講武地区に横穴式石室を内部主体とする古墳も知られている。これら以外にも横穴が多数分布することが知られており、古墳時代後期の段階には現在の集落の原形がすでにできあがっていたものと考えられる。

奈良時代の『出雲国風土記』をみると、具体的な記述はないが、この盆地は島根郡の余戸里と生馬郷に、盆地西端の佐太前遺跡の立地した周辺は、秋鹿郡神戸里に含まれると考えられている。こののち10世紀に著された『和名類聚鈔』にあらわれる「多久郷」が、『風土記』の「余戸里」が一郷に昇格した姿とみられ、この間にさらに開発が進み、人口も増加したのであろう。この頃に前後して講武盆地の中心部に条里制が施かれたと考えられ、現在でも「三ノ坪」、「八ケ坪」、「十一」といった小字名も残っている。

1．南講武草田遺跡
2．南講武大日遺跡
3．古浦砂丘遺跡
4．志谷奥遺跡
5．佐太前遺跡
6．南講武小廻遺跡
7．奥才古墳群
8．名分丸山古墳群
9．多久神社裏古墳群
10．尾坂古墳群
11．向山古墳群
12．藤山遺跡・藤山古墳
13．鵜灘山古墳群
14．狐堀古墳
15．中尾谷山古墳群
16．名分塚田遺跡
17．岩屋古墳
18．的松古墳
19．秋葉山古墳群
20．御津中の津古墳
21．寺の奥古墳群
22．寺の奥横穴群
23．茶畑横穴群
24．御津貝塚横穴群
25．恵谷横穴群
26．清水奥横穴群
27．嵐廻横穴群
28．寺尾横穴群

図２　南講武草田、大日遺跡と周辺の遺跡（１／50000）

Ⅲ. 調 査 の 概 要

南講武草田遺跡は、講武盆地の中ほど、山地から張り出す小規模な扇状地上に位置する。この周辺は、標高15～20mのゆるやかに高まる扇状地地形を呈している。この扇状地は南東の小さな谷から流れ出す土砂によって形成されたものと考えられる。この北方には講武盆地を横断する講武川とその支流中川が流れている。

この扇状地の水田に2×2mの調査区8ヶ所を設定した。調査区は東にあるものから順に第1、第2……第8調査区と呼称した。いずれの調査区でも層厚には差はあるものの、砂層あるいは礫層、ときにはその双方が検出されており、この付近では度重なる洪水による被害を受けていることが判明した。特に扇状地東方の第1～第5調査区では、弥生時代後期～古墳時代前期の包含層が埋没していた。このうち第3、第4、第5調査区では包含層に直接砂層あるいは礫層がかぶっており、古墳時代前期にかなりの洪水がおきたことが想定できる。この包含層以上、現代の耕作土に至るまで、遺構はおろか包含層も検出されておらず、古墳時代前期の洪水以来、集落は丘陵斜面や丘陵縁辺部の洪水の被害の及びにくい地点に移動したものと考えられる。

第6、第7調査区では出土遺物はなく、かなりの砂礫層の堆積が認められるので、生活には適さない地点であった可能性がある。第8調査区では他の調査区と異なり、堅い基盤と考えられる土層が検出され、これに掘り込まれた土坑内に木片が残存していた。

南講武大日遺跡は、標高16～21mの西向きの緩斜面に位置している。現在はこの斜面全体が畑として耕作されている。このなかに8ヶ所の調査区を設けて試掘した結果、弥生時代後期（中期に溯る可能性もある）から中世に至る遺構、遺物が検出され、この斜面全体が長い時代にわたって営まれた複合遺跡であることが判明した。

第5調査区では、少なくとも3棟の竪穴式住居跡が検出され、このうち1棟は小規模ながらも玉作りを行なっていた可能性がある。また、性格は不明ながらも黒色土の厚い堆積が認められ、特異な遺構として注目される。

その他、第4調査区でも竪穴式住居跡と考えられるもの4棟が切り合いながら検出され、第6調査区では弥生時代後期～古墳時代前半期の土器が多量に検出され、また、管玉1本も採集されている。第7、第8調査区でも竪穴住居跡の可能性のある落ちこみが確認できており、この斜面全体が長期間にわたって住居が営まれている集落であったことが窺えた。

この斜面の調査からは、講武の盆地西半を見下ろす地点に占地し、眼下の水田を経営しながら、農閑期には玉作りにも従事するといった集落を想像することができる。

1．南講武草田遺跡

この遺跡では、調査地８ヶ所のうち、東方に位置する５ヶ所で弥生時代後期から古墳時代前期の遺物の包含層が検出されている。この５ヶ所は、水田の標高から想定できる旧河道（図36参照）の東の微高地上に立地しており、この付近に生活の痕跡がとどめられているものと考えられた。

一方、西方の２調査区では度重なる洪水を示すと考えられる砂層、礫層が検出され、旧河道周辺の状況を示すものと考えられた。

また、西端の調査区では、基盤と考えられる土層に掘り込まれた土坑が検出されており、この付近は南側丘陵の縁辺部と考えられる。

よって、この遺跡は、谷から流れ出す河道脇の微高地上に立地し、この小河道および講武川、中川の氾濫原を水田として経営していたものと考えられる。

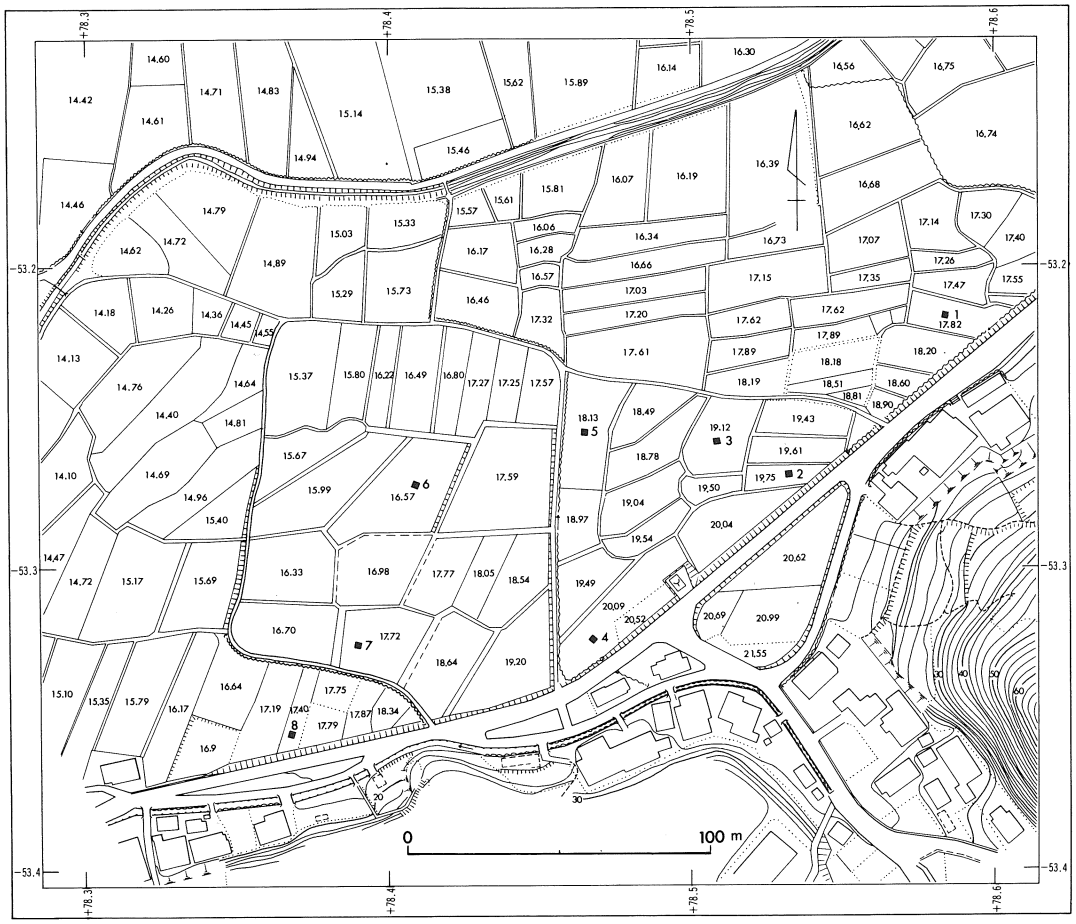


図３　南講武草田遺跡調査区配置図（１／2500）

第１調査区

この調査区は、南の谷から流れ出す土砂が形成する扇状地の東端に位置しており、また南東の丘陵の裾に相当する部分でもある。

この調査区を設定した水田面の標高は17.8mである。この地表下約0.3mが現在の水田耕作土であり、酸化した茶系色を呈している。この下層に淡灰色粘質土が0.3mの厚さで認められる。この下層にはやや砂質の淡灰色粘質土、砂礫、かなり砂を混える茶灰色粘質土、礫や砂を少し混える暗灰色粘質土が堆積している。この暗灰色粘質土層中には土師器細片を少量含んでいる。

この下部に少量の礫を混える黒灰色粘質土が堆積しており、この層中に後述するが、古墳時代前期の遺物が含まれている。遺構は認められないが、遺物に摩耗は認められず、周辺に遺構が存在するものと考えられる。この層は層厚約0.5mと厚い。

この包含層の上面は標高16.8m、下面は16.3mである。

この下部はよくしまった礫層となっている。

黒灰色粘質土から出土した遺物には図示できるものは少ないが、土師器甕、高杯があり、古墳時代前期の遺物と考えられる。その他に敲石と考えられるものが１点ある。

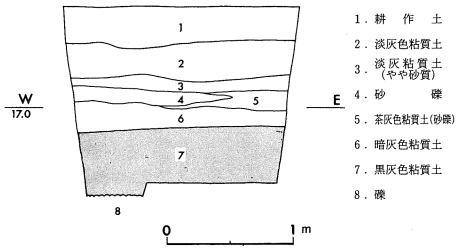


図４　第１調査区（１／60）

第２調査区

この調査区は、第１調査区の南西75m、遺跡の存在する扇状地の最高部付近に位置しており、水田面の標高は19.8mである。

この地表下約0.2mが現在の水田耕作土である。地表下約0.4mから厚さ約0.4mの厚い砂の堆積があり、この下層に２層の灰白色粘質土を挟んで、砂や有機物を含む黒褐色粘質土が堆積しており、この層中に弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が包含されている。この包含層は厚く、0.4mまでは確認したが、湧水が著しいため、下限まで確認することができなかった。包含層の上面は標高18.7mである。

包含層中には、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が含まれていた。また、凹石１も出土している。

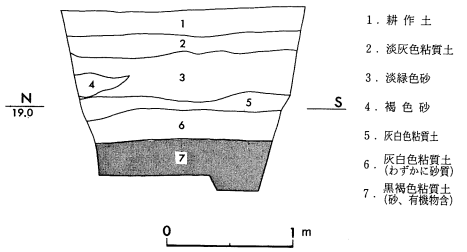


図５　第２調査区（１／60）

第3調査区

この調査区は、第2調査区の北西25mの地点に設定した。この付近は第2調査区からのびる微高地上に位置していると考えられ、水田面の標高は、19.1mを測る。

地表下0.2mが赤褐色を呈する現代の水田耕作土である。この下層に青灰色粘質土および青緑色砂が、それぞれ約0.1mの厚さで堆積している。この下層が層厚0.4mに及ぶ厚い灰色粘質土、0.1m程度の淡青緑色砂が堆積している。

この下に堆積する暗灰色粘質土が遺物包含層であり、かなりの礫も含んでいる。遺物はこれらの礫とともに検出され、調査区南辺沿いに、直口壺、複合口縁壺、甕体部片、同口縁片が、東辺沿いに複合口縁甕片、中央部で低脚杯片が検出されている。包含層の下限は未確認であるが、上限の標高は18.2mである。

出土遺物は、古墳時代前期のもののみである。

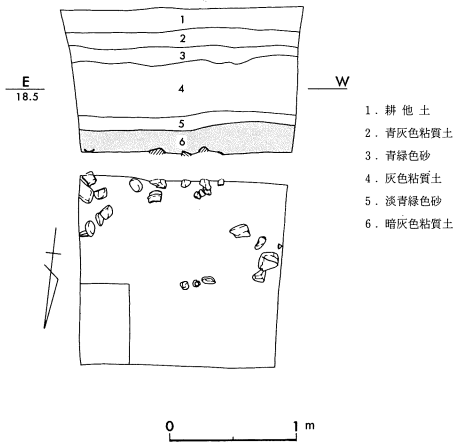


図6　第3調査区（1／60）

第4調査区

この調査区は、第2調査区の南西85m、扇状地状を呈するこの遺跡の最高所に位置している。水田面の標高は、20.1mである。

表土は厚さ約0.2mの耕作土で、この下層に暗緑灰色粘質土が堆積している。この土層から現代の水田に伴うと考えられる暗渠が掘り込まれている。上端で幅約0.4m、深さ約0.3mのもので、溝底に竹や雑木などを埋めている。

この暗緑灰色粘質土の下層に、暗灰色粘質土、白色ブロックを含む暗灰色粘質土、黄土色のブロックを含む暗灰色粘質土、 緑色ブロックを含む灰色粘質土が、 それぞれ約0.2mの厚さで堆積している。黄土色のブロックを含む暗灰色粘質土と、灰色粘質土の間には部分的に砂礫層が挟まれている。灰色粘質土の下層には黒褐色土が約0.2mの厚さで堆積しており、礫を多く含んでいる。この土層には調査区西隅に落ち込みが検出されており、遺構である可能性がある。

この包含層中には、古墳時代前期の遺物が含まれていた。

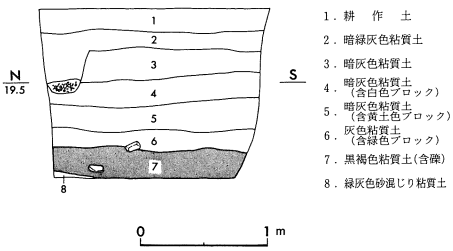


図7　第4調査区（1／60）

第5調査区

この調査区は、第3調査区の西方45mの地点にある。この付近は、第2調査区からのびる微高地上に位置していると考えられ、水田面の標高は18.1mである。

表土は厚さ0.2mの耕作土で、この下に厚さ約0.3mの暗灰色粘質土が堆積する。この下層が礫および暗緑灰色砂層である。この砂層中には、ふた股に分かれる長さ0.9m、太さ約0.2mの流木が埋没していた。この流木の周辺には、有機物もかなり堆積しており、木とともに木の葉などがたまっていたものであろう。

この砂層下に堆積するのが黒褐色粘質土で、この層が弥生時代末から古墳時代前期の包含層となっている。この土層は調査区北辺で落ち込みをなしており、断面でみると、さしわたし約1m、深さ約0.3mを測るものである。この落ち込み内には、弥生時代後期末の土器が、つぶれた格好で埋没していた。

この包含層上面の標高は17.6mである。この下層は、深くまで続く淡緑色の砂礫である。

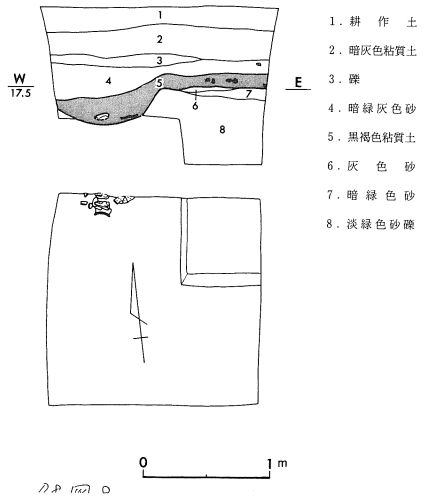


図8　第5調査区（1／60）

第6調査区

この調査区は、第2調査区の西125mの扇状地内のわずかに低い部分に位置し、水田面の標高は16.6mである。

地表から深さ0.2mが耕作土であり、この下層に厚さ0.1mの灰色粘質土、0.2mの暗灰色粘質土、0.05mの混礫暗灰色粘質土、0.1mの暗灰色粘質土、0.2mのやや茶色がかった暗灰色粘質土が堆積している。

これ以下に淡緑灰色、緑灰色の砂礫が堆積している。

この調査区では、地表から深さ1.5m(標高15.1m)までのところでは包含層は認められず、出土遺物もなかった。

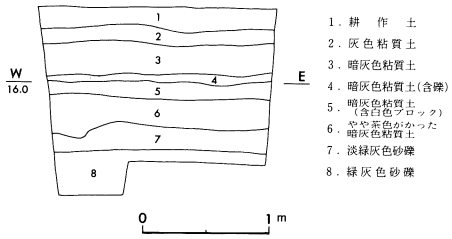


図9　第6調査区（1／60）

第7調査区

この調査区は、第4調査区の西方約80mの地点に位置し、扇状地のわずかに低い部分から南の丘陵に向かって高まり始める地点に相当する。水田面の標

高は17.7mである。

ここでは地表から深さ1.5m（標高16.2m）までの間で、11枚の土層が確認され、それは粘質土6層、砂層あるいは礫層5層からなる。これらの土層は互層状に堆積していた。この状況は、度重なる洪水がこの地点を襲ったことを示していよう。表土は厚さ0.2mの耕作土、その下層に青灰色粘質土、礫を混える青灰色粘質土、暗灰色粘質土、緑灰色砂礫、暗灰色粘質土、青緑色砂礫、暗灰色粘質土、礫、青灰色粘質土、暗青灰色砂が堆積している。

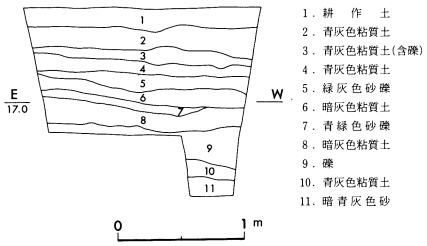


図10　第7調査区（1／60）

一方、調査区西壁には上端幅約1.5m、下端幅約0.3m、深さ約0.7mの大がかりな暗渠が東西を軸として掘り込まれていた。暗渠の底には、竹や雑木等が敷きつめられている。上層には、掘り上げた土砂を埋め戻したため、かなりの礫を含んでいる。

この調査区では、包含層はおろか、遺物も検出されていない。

第8調査区

この調査区は、第4調査区の西約110m、南側の丘陵の裾に相当する地点で、8ケ所ある調査区のうち、最西端に位置している。水田面の標高は17.4mである。

地表から約0.2mが耕作土であり、その下に青灰色粘質土と部分的に礫を含んだ茶色砂が堆積し、暗灰色粘質土となる。この層中にはわずかではあるが炭化物と、土師質土器細片を含んでいるが、土器には図示できるものはない。この下層に黄褐色砂が薄く堆積し、約0.2mの灰白色粘質土、砂をかなり含む淡緑灰色粘質土、暗灰白色粘質土がこれに続く。

この層中から下の堅い黄色がかった灰色粘質土にむけて調査区南辺で土坑2が掘り込まれており、この坑中にはそれぞれ丸太様の木片が残っていた。一見柱穴様を呈してはいるが、木片には加工痕は認められず、その性格は不明である。この土坑の掘り込まれる黄色がかった灰色粘質土は、非常に堅くしまっており、この付近の基盤層と考えうる。土坑にともなう遺物はなく、時代を特定することはできなかった。

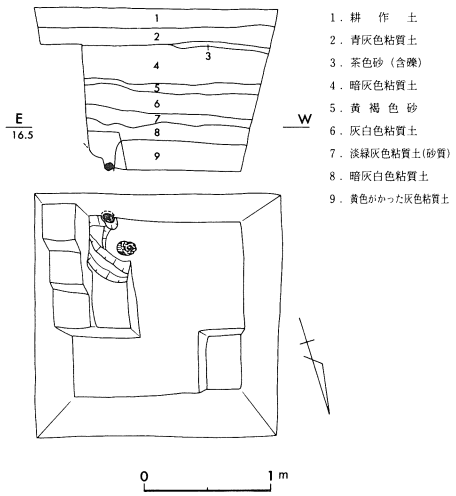


図11　第8調査区（1／60）

南講武草田遺跡出土遺物

第1調査区（1～3、40）この調査区で図示できるものは3点で、甕（1）は単純口縁のもので、口径22cmを測り、やや厚手のもの、高杯（2）は、小ぶりなもので、杯底部に粘土塊をつめこんで仕上げるものである。高杯（3）は、脚筒部片で裾部に円形の透しを有する。外面にはタテ方向のハケメののちにヨコの方向のミガキを施し、内面はヘラケズリで仕上げる。敲石(40)は、長辺15.5cm、短辺7.6cmを測るもので、両端に敲打痕をとどめ、両長辺は平坦になるほど摩耗している。

第2調査区（4～11、41）この調査区では弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土した。壺（4）は口縁端部に上下に肥厚する立ち上がりをもつもの、（5）は鼓形器台の一部と考えられ、外面にクシ状工具による多条の沈線を施すものである。内外面に赤色塗彩を施す。（4、5）は弥生時代後期の遺物と考えられる。甕（6、7、8）は複合口縁を呈するもので、端部に平坦面を有し、複合口縁部は外方に鋭く突出する。鼓形器台（9、10）はともに受部の破片である。（6～10）は古墳時代前期のものと考えられる。甕（11）はやはり複合口縁状を呈するが、各部の手法に退化した様相が認められ、上述のものよりも若干後出のものと考えられる。凹石（41）は長辺12.8cm、短辺11.8cm、厚さ5.5cmを測るもので、表裏の2面中央に敲打痕、その周辺に摩耗が認められる他、側面にも打痕をとどめている。

第3調査区（12～18）この調査区からは古墳時代前期の遺物のみが検出された。甕（12、13）はシャープなつくりの薄いもの、壺（14）は口縁端部を外方に大きく折り曲げ、その上面に平坦面をなすものである。直口壺（15）は長く直立する口縁部に小ぶりな体部が接合するものと考えられ、口縁外面にはタテ方向のヘラミガキを施している。低脚杯（16）は脚部のみの破片である。胴部の破片（17）は、内外面ともタテ方向のハケメで仕上げ、同じ（18）は外面にハケメ原体による羽状文を有しており、肩部の破片と考えられる。

第4調査区（19～27）ここでは弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が検出されている。甕（19）は口縁端部が薄くひき出され、複合口縁部の突出はやや下方に垂れるもので、口縁外面にはクシによる沈線がナデによって消されている。甕（20、21）はつくりのシャープなもので、（20）は内傾する口縁部を有する。（22）は単純口縁の甕で、端部を内側にわずかに肥厚させる。（23）も単純口縁の甕である。体部外面にごく粗いハケメを施す。高杯（25、26）はともに脚内面杯底部に刺突痕を有し、杯部と脚部の接合部にヘラミガキの痕跡をとどめている。（27）は低脚杯の杯部片と考えられるもので、外面にヨコ方向の細かいヘラミガキ、内面にタテ方向の太いヘラミガキを施す。（19）が弥生時代後期末、それ以外は古墳時代前期の遺物と考えられる。

第5調査区（28～39、42）甕（28、29）は比較的薄づくりのもの、（30、31）はやや大形品である。（32、33）は薄くシャープなつくりを呈し、複合口縁部からなだらかに肩部に移行している。（33）

は肩部にクシ状工具による波状文をもち、底部にはかすかな平底をとどめている。(32、33) ともに外面にススが厚く付着している。(34) は単純口縁の甕で、端部はかすかに内側に折り曲げている。(36〜38) はいずれも高杯杯部片と考えられるもので、いずれも内外面をヘラミガキで仕上げている。(36、37) は口縁が外反するのに対し、(38) は内湾している。(39) は杯底部から脚部にかけての破片で、脚内面杯底部に刺突痕を有する。

以上の出土遺跡のうち、(28、31、32、33) は弥生時代後期末の遺物と考えられ、それ以外は古

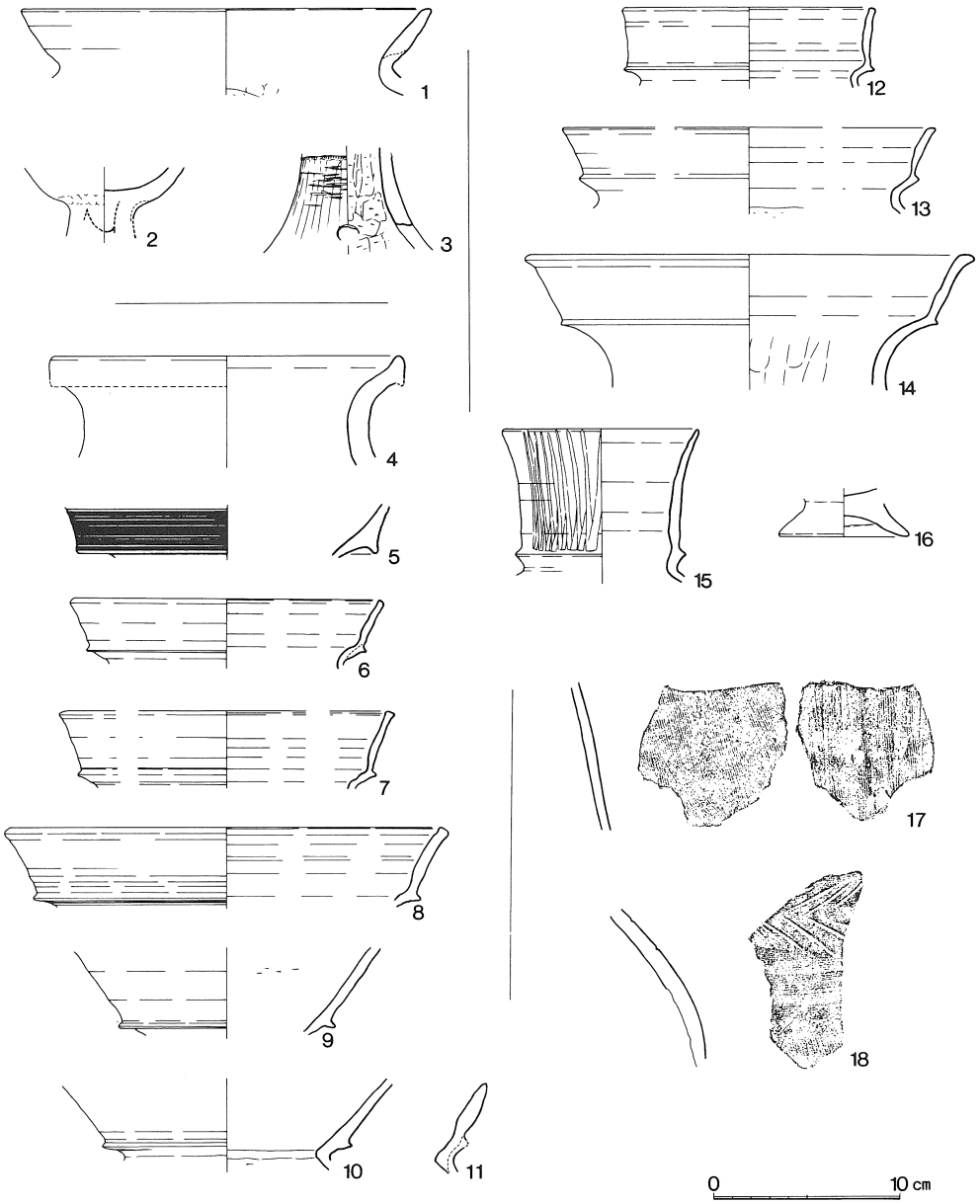


図12　南講武草田遺跡出土遺物実測図（1）（1〜3；G 1、4〜11；G 2、12〜18；G 3）

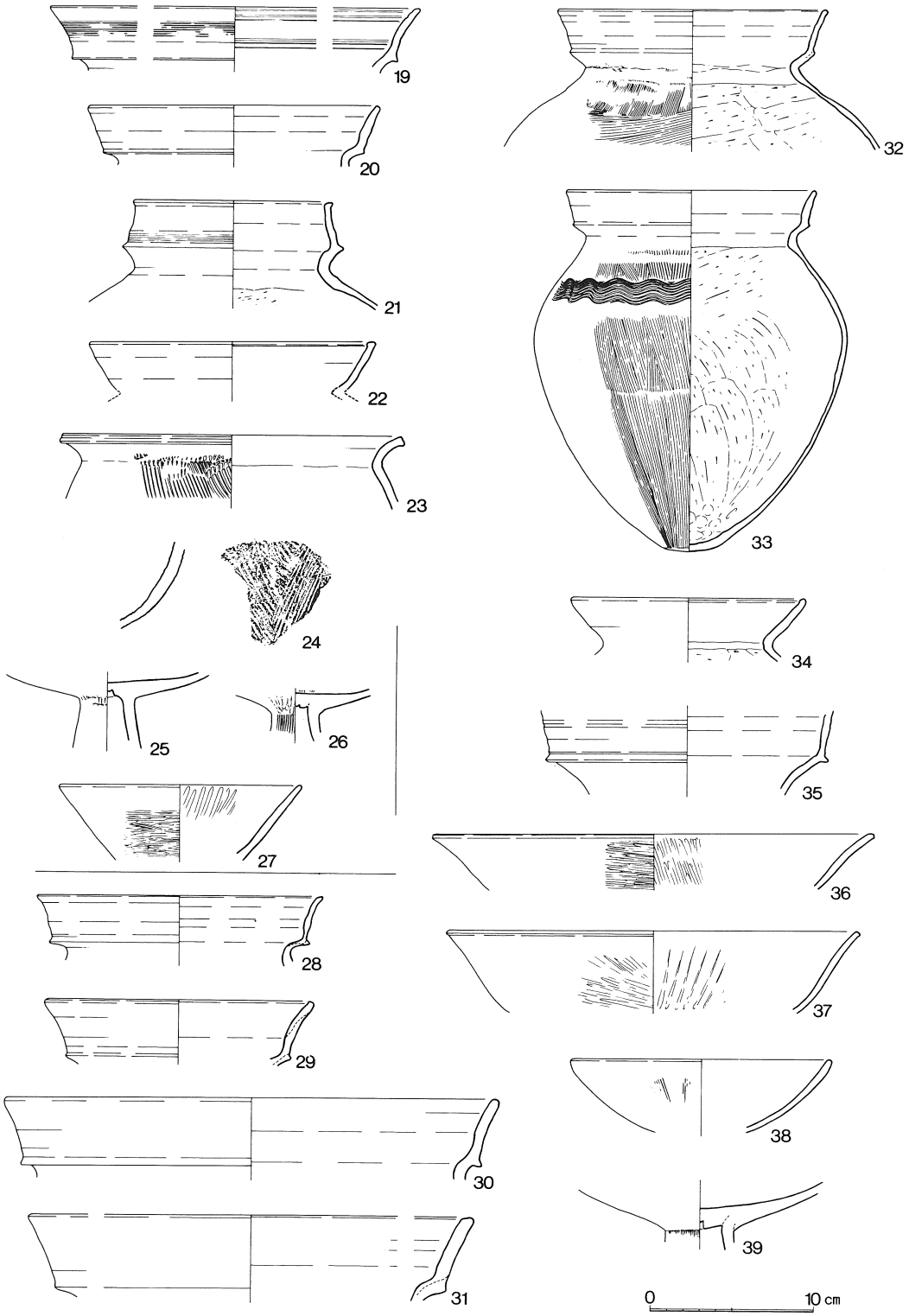


図13　南講武草田遺跡出土遺物実測図（２）（19～27；Ｇ４、28～39；Ｇ５）

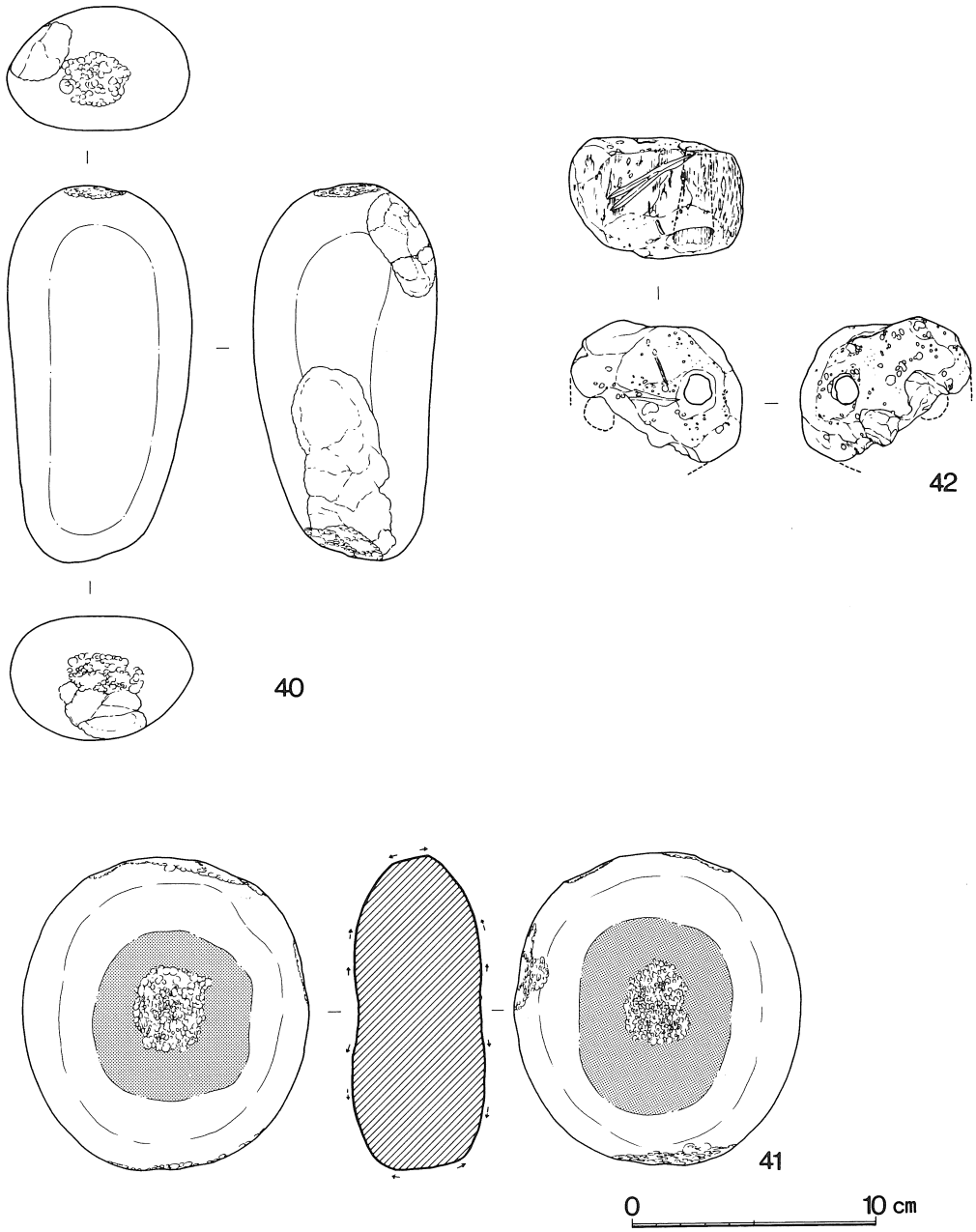


図14　南講武草田遺跡出土遺物実測図（3）（40；G 1、41；G 2、42；G 5）

墳時代の遺物である。

軽石（42）は、楕円形の平面形を有し、2面の平坦面をもつ。この平坦面に2ないし3の穿孔をもっており、漁網などの浮子（うき）である可能性がある。また、外面には擦痕をとどめている。

以上のように本遺跡の包含層出土遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期までの時期に限られている。

2．南講武大日遺跡

この遺跡は、講武盆地を北西に臨む南北にのびる緩斜面上に位置している。この斜面の東側は、道路および土取りによってえぐられてはいるが、現在の地形を観察するかぎり、この斜面から、かなり急な角度で立ち上がって上段の平坦面に至る現在の地形に近いものであったようである。斜面は標高約15mから21mにかけてのもので、谷の奥の南方に向かうにしたがい、その幅と高さを増してゆく。この斜面下の水田は、現在県道の盛土によって、さらに下の水田と分断されているが、本来は、なだらかな傾斜をもって続く、ひとつながりの谷水田であったと考えられる。

調査区は、この斜面上に畑作作物を避けながら不整形な形で設定した。８ケ所設けた調査区のいずれでも遺構、包含層が検出されており、この斜面全体が、後述するように弥生時代から中世に至る複合遺跡であったようである。

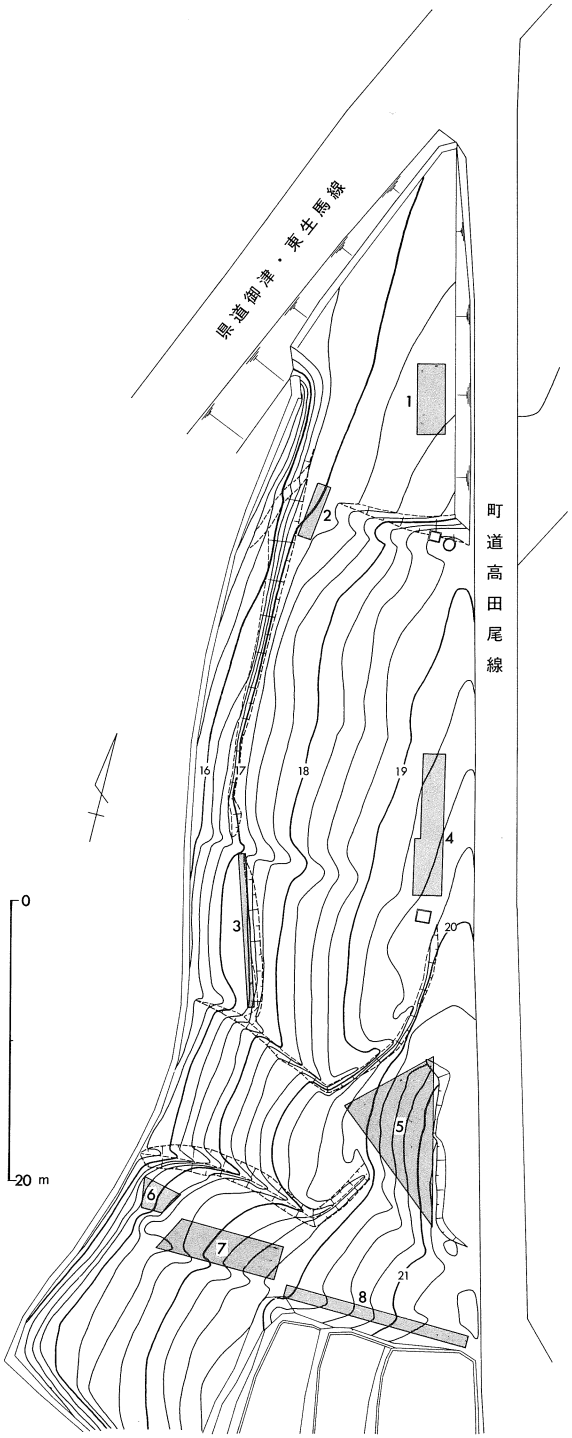


図15　南講武大日遺跡地形測量図（１／500）

第１調査区

この調査区は、斜面の北端近くに設けた５×２ｍのものである。調査区上面の標高は、17.5mである。地表から0.5mは、近時東側の斜面から流し込まれた造成土で、この下に以前の耕作土が存在する。この旧耕作土および明褐色土を除去すると、暗黄灰色の地山となり、この面にＳＫ０１が掘り込まれていた。この土坑は、平面隅丸の方形を呈し、南北にやや長く1.6m、短辺1.4m測る。検出面からの深さは約0.2mで、底面はほぼ平坦である。

この土坑の覆土は２層からなり、上層は地山が粉砕された黄褐色土である。この土層中から須恵器甕片が検出された。下層は非常に粘性の高い茶色粘質土で、特に東側では混入物が少ないが、西側では少量の砂と炭化物を混えている。

この土坑内の粘質土が、故意に貯えられたものか、流水などにより自然にたまったものかは判然としないが、注目される遺構である。その時期も、上層出土遺物として須恵器甕片があるが、これをもって遺構の時期とは決しかねる状況である。

また、この遺構を検出した地山面は調査区内でほぼ水平であり、この周辺で整地が行なわれている可能性も考えられた。

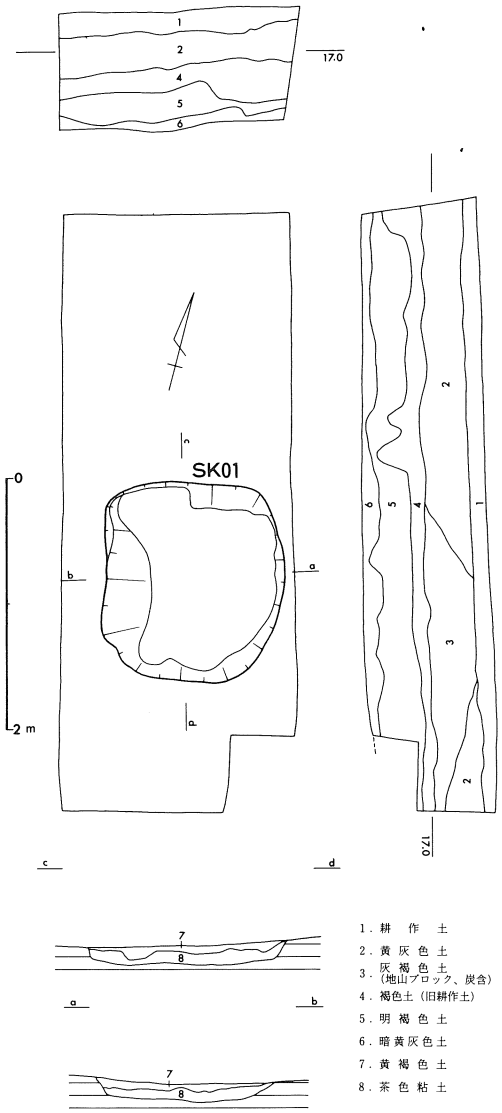


図16　第１調査区（１／60）

第２調査区

この調査区は、第１調査区の南西約10mの地点に設けた４×１mのものである。調査区上面の標高は17.1mである。遺跡の立地するこの斜面は、この地点を境に急な斜面をなして下方の水田へと降ってゆく。後述するように、この調査区付近では盛土がなされているため、本来は現状ほどの急斜面ではなかったものと考えられるが、検出した地山面は若干の勾配をもって降っている。第１調査区同様、厚さ約0.2mから0.5mの盛土がなされているが、第１調査区ほど明瞭には分層できず、土層は複雑な様相を呈する。この盛土を耕作するに際して、耕作は深く旧耕作土にまで及んでいる。

この調査区では、第１調査区のような堅い地山は検出されず、やや軟質の黄白色土が地山と考えられた。この面で精査した結果、２本の溝と考えられる落ち込みと、それを切って掘り込まれる土坑14を検出した。このように遺構が複雑に切り合う様相を呈したことと、調査区が狭いことから、遺構を掘り上げることは控えたが、この付近一帯に複雑に遺構が錯綜している状況が想定できた。

この調査区からは、須恵器小片と回転糸切り痕をとどめる土師質土器が検出されている。

第３調査区

この調査区は、遺跡のほぼ中央下段に長さ約10.5m、幅0.5mの細長いトレンチを設定した。調査区上面は標高18.3mである。この地点は畑作により若干の削平を受けているものと考えられる。

耕作土の下層がすぐ遺物包含層となっており、土師器、須恵器が検出されている。しかし、周辺の作物の関係から深く掘っておらず、遺構は確認できなかったが、炭化物などが多量に検出される土層もあり、遺構が近くに存在することが予想される。

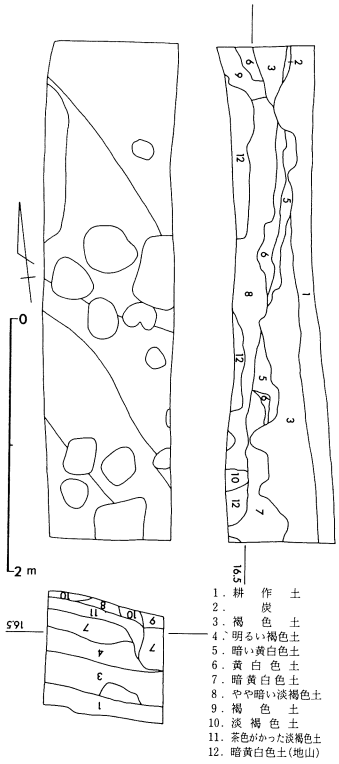


図17　第２調査区（１／60）

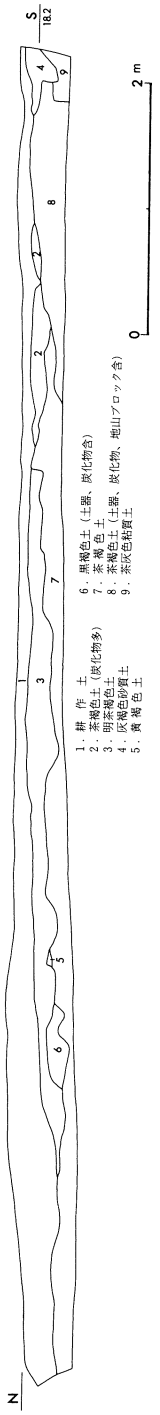


図18　第３調査区（１／60）

第４調査区

この調査区は第１調査区の南方約25mの地点に設定した10×２mの調査区である。調査区上面の標高は、約19.3mである。

耕作土とその下層の淡褐色土を除去すると東側で地山面が検出され、西側ではこれに掘り込まれる遺構が検出された。これらの遺構は切り合い関係を示し、平面プランからは、おそらく４棟の竪穴住居跡と考えられる。南にあるものが切り合い関係から最も新しく、北に向かうにつれて古くなってゆく。南端のＳＩ０１は平面方形プランを呈する住居跡で、この１棟のみを発掘した。規模は調査区内で4.5mをはかるので、これ以上の長さがＳＩ０１の１辺の長さである。しかし、調査区内では柱穴などのピットは確認できていない。床面近くで須恵器蓋および鉄鋌１が検出されている。また、この床面で弥生土器片がまとまって検出されており、ＳＩ０１以前の遺構がこの下部に埋没していると判断された。

これら４棟の竪穴住居の建築順序は以下のようになる。

(古)ＳＩ０４→ＳＩ０３→ＳＩ０２→ＳＩ０１(新)

また、調査区北方で柱穴状のピットが８検出されている。これらはＳＩ０４、０３の覆土に掘り込まれるものである。平面でみるかぎりでは、柱穴となるような規則的な配列は認められない。

ＳＩ０１で検出された須恵器は山陰の須恵器編年[9]Ⅳ期に含まれるもので、古墳時代後期の住居址と考えられた。ＳＩ０１床面下の遺物は、弥生時代後期のものであった。

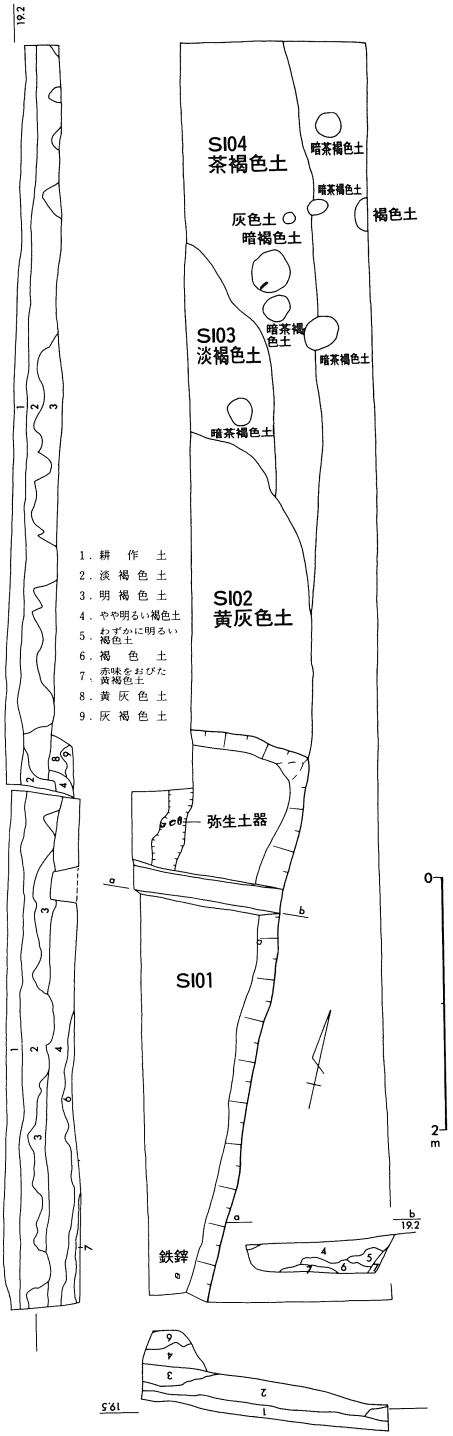


図19　第４調査区（１／60）

第５調査区

この調査区は第４調査区の南方約15mの地点に設けた三角形の調査区である。調査区の地表の標高は21.1mから19.2mにかけてである。また、調査区東側の道路に沿った部分は削平されていたが、遺構が残存する可能性を考えて、この部分についても精査を行なった。

この調査区からは、竪穴住居跡３棟、黒色土の厚い堆積、落ち込み、溝状遺構、土坑群が検出されている。

これらの遺構の新旧は切り合い関係や出土遺物から以下のようになる。

（古）溝状遺構 → 黒色土の堆積 → ＳＩ０５ → ＳＩ０６ → ＳＩ０７ → 落ち込み（新）

溝状遺構は調査区東側で検出された遺構で、残存長7.0m、幅0.7mを測る。この溝が埋没した後に黒色土が堆積しており、南端はＳＩ０５によって切断されている。

黒色土の堆積は、焼土、地山ブロックを多量に含み、土器細片も混えている。現状ではよくしまっており、非常に堅い。南北に5.6m以上、東西には3.8mと広い範囲に分布する。南北セクションでは北から南に向かってゆるやかにのぼってゆき、南端はＳＩ０５によって切られている。東西のセクションでは２つの落ち込みを形づくりながら堆積していることが観察できる。この黒色土は、多量に炭化物を含んでおり、灰が堆積、凝固したもののようにもみえるが、その性格は不明といわざるをえない。

ＳＩ０５は、調査区南方で検出された平面円形を呈する竪穴住居跡である。直径は約４m程度になるものと考えられる。この住居跡の南西側は、ＳＩ０６により、西側は落ち込みによってそれぞれ切断されている。住居址壁の残る東側では壁の立ち上がりは直立に近く、床面から0.6mある。この壁に沿って幅0.2m、深さ0.1～0.2mの溝がめぐっており、これは壁体となる板材を受けるための溝と考えられる。この板材の痕跡と考えられるのが、南北のセクションにみえる第12層の暗黄褐色粘質土である。床面は、ＳＩ０６とそれに伴う溝が切り込んでいるため、柱穴等は明瞭には確認できないが、柱穴状を呈する土坑は５箇検出できた。この住居跡覆土中には、多量の石英屑や水晶小片が含まれており、ここでは小規模な水晶を原材とする玉作りが行なわれていた可能性がある。また、北東の壁沿いで検出されたＳＫ０２は、平面長方形を呈する土坑で、深さは0.25mである。また、床面中央寄りで検出した大形の土坑ＳＫ０３は、0.9×0.7mの楕円形平面を呈するもので、深さ0.45mを測る。これに隣接するＳＫ０４は、小形のものであるが、この坑内からガラス玉１が検出された。以上

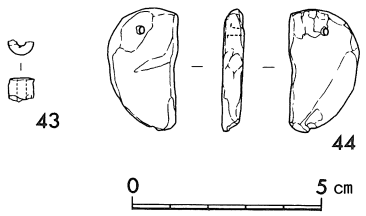


図20　第５調査区出土玉（１／２）

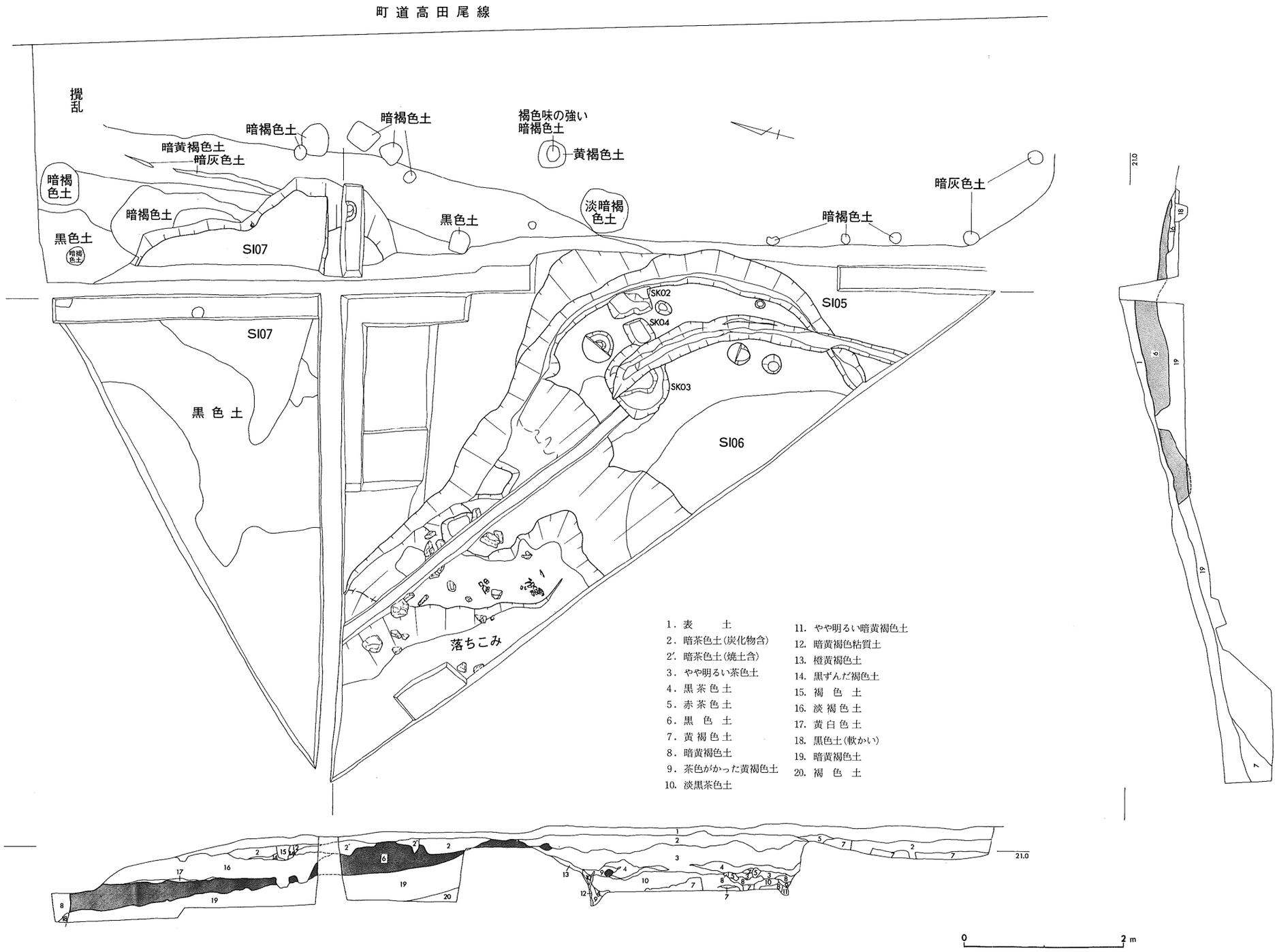


図21　第5調査区（1／60）

の３土坑は、しばしば玉作工房址で検出される工作用のピットである可能性がある。

この住居跡の時期を特定できる遺物の出土はなかったが、平面円形プランを呈すること、ヘラケズリを施したと考えられる薄い土器片が出土したことから弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられる。

ＳＩ０６は、ＳＩ０５を切って作られた住居跡である。やはりＳＩ０５を切る溝はこの住居跡と同心円状を呈するので、このＳＩ０６に伴うものと考えられ、住居跡外側に築かれた土堤の矢板を打ち込んだ溝と考えておく。ＳＩ０７は調査区西方で検出された住居跡である。黒色土に掘り込まれたもので、東側は削平を受け、西側は流失している。平面形は方形と考えられ、一辺だけ残る南辺では、土層図にみるように壁沿いに溝をもつもののようである。床面には黄白色土が薄く認められ、貼床を行なっていた可能性がある。出土遺物には図示できるものは少ないが、古墳時代中期頃と考えられる土師器がある。この住居跡は黒色土のなかに掘り込まれたものであり、前述したように黒色土が灰の堆積したものであるならば、この住居跡が営まれる時代にはすでに、かなり固くしまっていたものと考えられる。

調査区南西の落ち込みは、ＳＩ０５、０６を切るように掘りこまれている。段状に落ちこむこの遺構は、明瞭な形状を呈さないが、有孔円板片あるいは勾玉をかたどった石製模造品が１点と、回転糸切り痕をとどめる須恵器と土師器数点が出土しており、この調査区内では最も新しい時代の遺構である。

以上のようにこの調査区では、幅広い時代にわたる遺構が複雑に錯綜した状況を呈していた。

ＳＩ０５内のＳＫ０４出土のガラス玉（43）は、検出時に割れてしまったが、径0.7cm、長さ0.6cm以上の円筒形を呈するものである。半透明の淡い青色を呈し、部分的に緑色にみえる部分もある。現在確認できる一端面は、平面をなさずに屈曲する部分がある。落ち込み内検出の石製品（44）は、一見えぐりのない勾玉状を呈するが、これが、勾玉を模した石製模造品なのか、有孔円板の折損したものかは判然としない。長さ3.27cm、最大幅1.86cm、厚さ0.54cmを測る。暗緑色を呈する軟質の石材で作られている。端部に一ケ所径0.25cmの一方穿孔の穴がある。

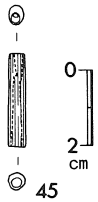


図23
第６調査区
出土玉（１／２）

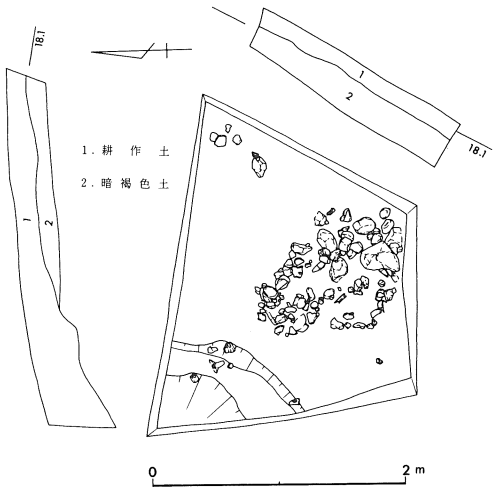


図22　第６調査区（１／60）

第６調査区

この調査区は第５調査区の南西約20m、斜面が急傾斜をなして下段の水田に降ってゆく地点に位置する調査区である。調査前の標高は18.3mから17.5mにかけてであった。調査面積は約3.5m²である。

表土は厚さ約0.2mの耕作土でこの土層は斜面の下段に向かって大きく降ってゆく。この下層が炭化物、焼土、地山ブロックを多く含む暗褐色土である。この土層中に大量の石材と混在するように弥生土器、土師器が含まれていた。石材は一抱えもあるものからこぶし大以下のものまでが、1.5×１mの範囲にまとまってはいるが、規則的な配列をなすわけではない。この遺物を包含する暗褐色土は、隣接する第７調査区下半で上面のみ検出されている暗褐色土の落ち込みに対応する可能性がある。

この石材群の北西端がかかるように、調査区内約４分の１を深さ約0.1m掘り下げたところ、碧玉製の管玉１が出土した。管玉は成品で、この地点が墓壙となる可能性も考えられたため、精査したが、遺構を示すような土層の変化は認められなかった。

管玉は、長さ2.48cm、太さ0.48cmを測るもので、穿孔は両側からおこなっている。外面には円柱状にするための研磨痕が連なる。

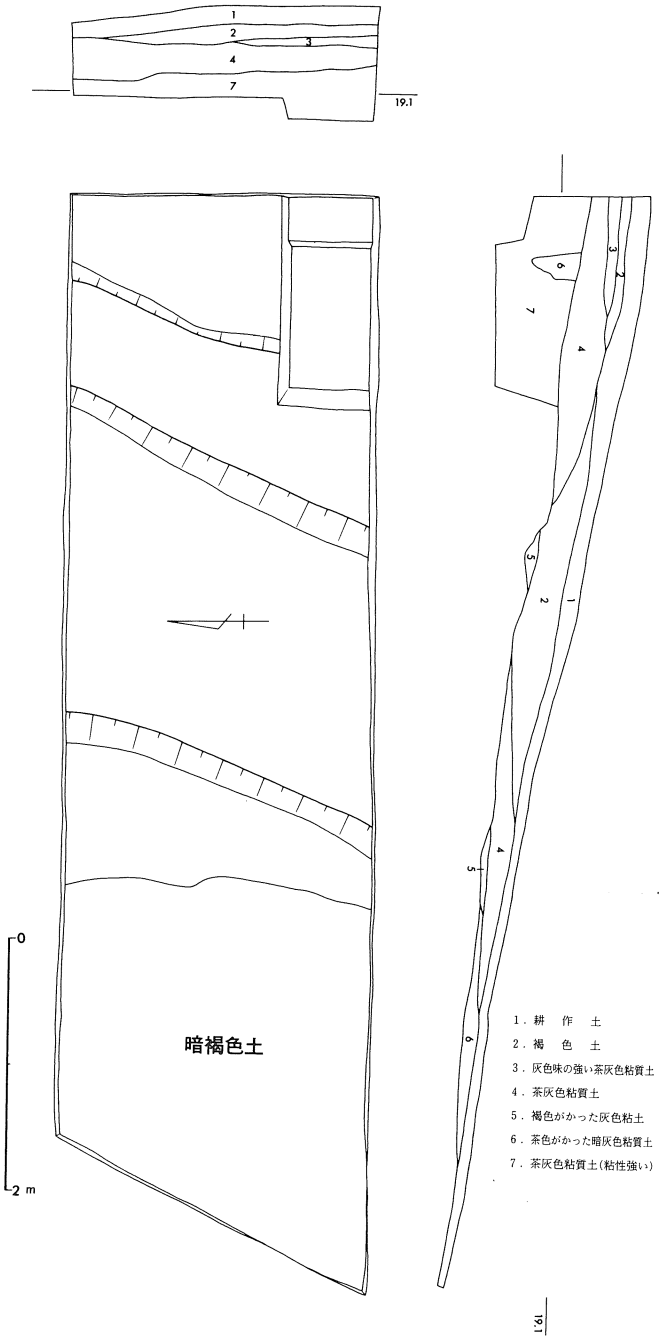


図24　第７調査区（１／60）

出土土器は、弥生時代後期と古墳時代前半のものを主としている。弥生土器は甕を主とし、土師器は甕と高杯を主とし、これに小形丸底壺が加わる。さらにこの調査区でも石英や水晶片が若干採集されている。

第７調査区

この調査区は第６調査区の南東約３ｍの付近にほぼ隣接するように設定した調査区で、遺跡の南端近く、斜面のほぼ中ほどに位置する。長辺約８ｍ、短辺2.5ｍを発掘した。調査前の地表は、標高19.8ｍから18.4ｍのゆるやかに降ってゆく畑地であった。

この付近は以前水田として耕作していたところを畑地としたため、旧水田耕作土と考えられる茶灰色粘質土の上面はほぼ水平に堆積し、畦ぎわで耕作が地山にまで及んだ部分については、褐色がかった灰色粘土が堆積している。平面的にもこの褐色がかった灰色粘土を除去した状態が段になって検出された。

調査区下方である西端で、暗褐色土の落ち込みが検出されている。前述したように、隣接する第６調査区包含層と酷似する土層で、一つづきのものとして捉えられる可能性がある。堀り上げてはいないが、上面で検出された遺物は、第６調査区とほぼ同時期の弥生時代後期と古墳時代前半の遺物である。この調査区でも石英や水晶片が検出されている。

第８調査区

この調査区は、第７調査区の上方に隣接して設定した長さ13.5ｍ、幅１ｍのトレンチである。調査前は標高21.6ｍから20ｍにかけてゆるやかに降ってゆく斜面であった。

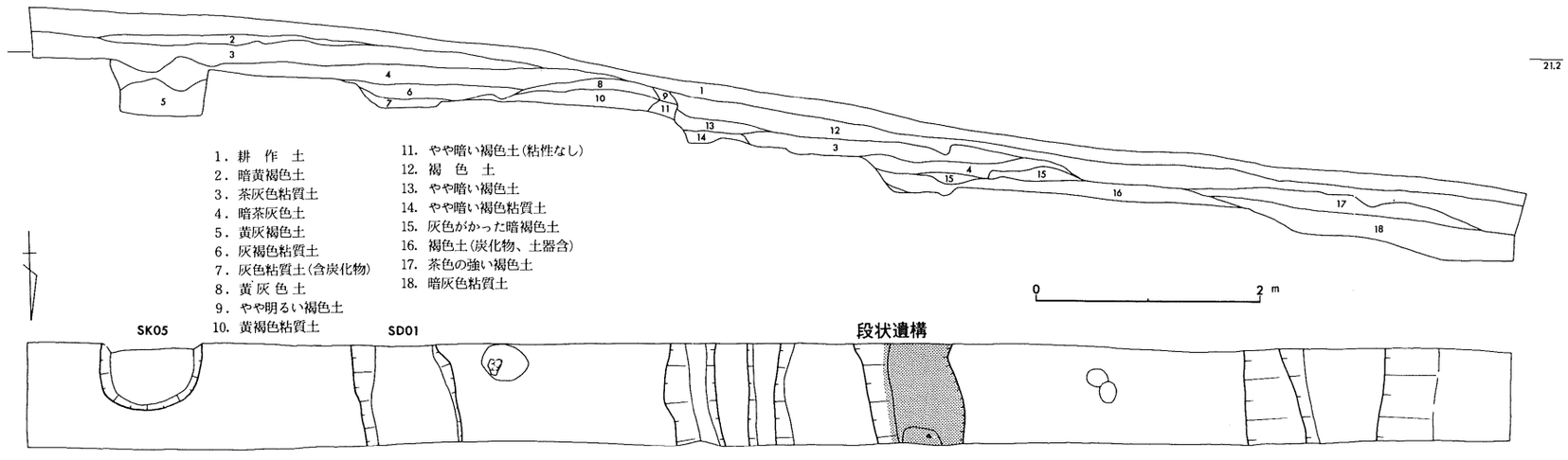


図25　第８調査区（１／60）

この付近も以前水田として耕作していた部分を畑としたもので、隣接する畦畔に対応する土層が認められる。こうした土砂を除去したところ、やや大形の土坑（ＳＫ０５）、溝（ＳＤ０１）、段状の落ち込みなどが検出された。また、遺構までの土層には水晶、石英、碧玉片が含まれていた。

ＳＫ０５は、地山に堀り込まれた径0.9mの平面円形を呈するもので、深さ0.5mである。土坑内には暗茶灰色土および、黄灰褐色土が堆積していた。出土遺物はなく、時期などは不明である。

ＳＤ０１は、調査区に直交するように検出され、幅0.9m、検出面からの深さ0.2mを測る。溝内には炭化物をかなり含む灰色粘質土が堆積していた。ここからも出土遺物はなかった。これに隣接して径0.4mの土坑がある。

段状の落ち込みは、調査区のやや中ほどで検出された。落ち込みの深さは0.3mである。ここには暗褐色土が堆積しており、この土層が包含層である。古墳時代前半の遺物が出土した。この落ち込み内に土坑があり、ここから約1.2m離れて土坑が２つある。この落ち込みと周辺の土坑は、谷側の部分が残存していない住居跡の可能性がある。この下方は水田の耕作によって落ち込んでいる。

南講武大日遺跡出土遺物

第１調査区（46）この調査区内ＳＫ０１上層から検出された須恵器甕片である。灰色を呈する。

第２調査区（47、48）中世の土師質土器片が出土した。摩耗しているが底部に回転糸切り痕をとどめている。いずれも橙白色を呈する。

第３調査区（49～52）この調査区からは土師器、須恵器が出土している。土師器甕（49）は、複合口縁を有するもので、口縁端部を外方に折り曲げている。(50) は須恵器蓋で、ケズリがかなり下まで施される。(51、52) は須恵器杯で、両者とも高い立ち上がりを有し、受部もしっかりとしたつくりのものである。土師器は古墳時代前期、須恵器は山陰の須恵器編年[(9)]II期に相当しよう。

第４調査区（53～55）ＳＩ０１内で検出された須恵器蓋（53）は、やや厚手のつくりのもので、天井部にヘラケズリの痕跡をとどめる。山陰の須恵器編年Ⅳ期に属するものであろう。これをもってＳＩ０１の時期と考えることができる。(54、55) は、ＳＩ０１床面下に埋没していると考えられる遺構に伴うもので、弥生時代後期の遺物である。(54) は甕口縁、外面に５条のクシ状工具による沈線をめぐらせている。(55) は鼓形器台の脚部と考えられ、端部の平坦面に３条の沈線をめぐらせた後、粘土粒を貼り付けて円形浮文としている。

第５調査区（56～63）この調査区からは前述のＳＩ０５のガラス玉、落ち込みの勾玉様石製品の他、時期を決めうる遺物はごく少ない。(56、57) はＳＩ０７に伴うと考えられるもので、(56) は甕の体部破片で、外面に粗いハケメを施し、内面にヘラケズリ痕をとどめる。(57) は高杯杯部で、平坦な杯底部は器壁厚い。以上のように(57、58)は古墳時代中期頃の遺物と考えられ、これをもってＳＩ０７の時期と考えておく。(58～63) は落ち込み内出土のもので、底部に回転糸切り痕を有す

る須恵器（58、59）と土師質土器（60〜63）である。(58）は杯、(59）は皿であろう。杯（60、61）は摩耗しているがいずれも底部に回転糸切り痕をもつようである。(62）は（60、61）と同様の焼き上がりを呈する小皿である。底部に回転糸切り痕をとどめる。(63）は脚付の杯の脚部と考えられる。

第６調査区（64〜92）この調査区からは弥生時代後期から古墳時代前半にかけての遺物が出土している。壺（64）は大きく広がる口縁部をもつものである。弥生時代中期に溯る可能性がある。(65〜71）は弥生時代後期の甕で、直立する複合口縁部に３〜９条の沈線を施している。(65〜67）はヘラによる沈線を施すものである。(72、73）はこういった口縁部に対応すると考えられる平底の底部である。(74〜90）が古墳時代前半の遺物である。(74）は複合口縁の甕、(75〜78）は単純口縁の甕で、口縁端部を内側に肥厚させるもの（75)、外方に軽く折り曲げるもの（76、78）がある。小形丸底壺（79、80）は、いずれもやや短い口縁部を有するもので、丁寧に作られている。高杯（81〜87）

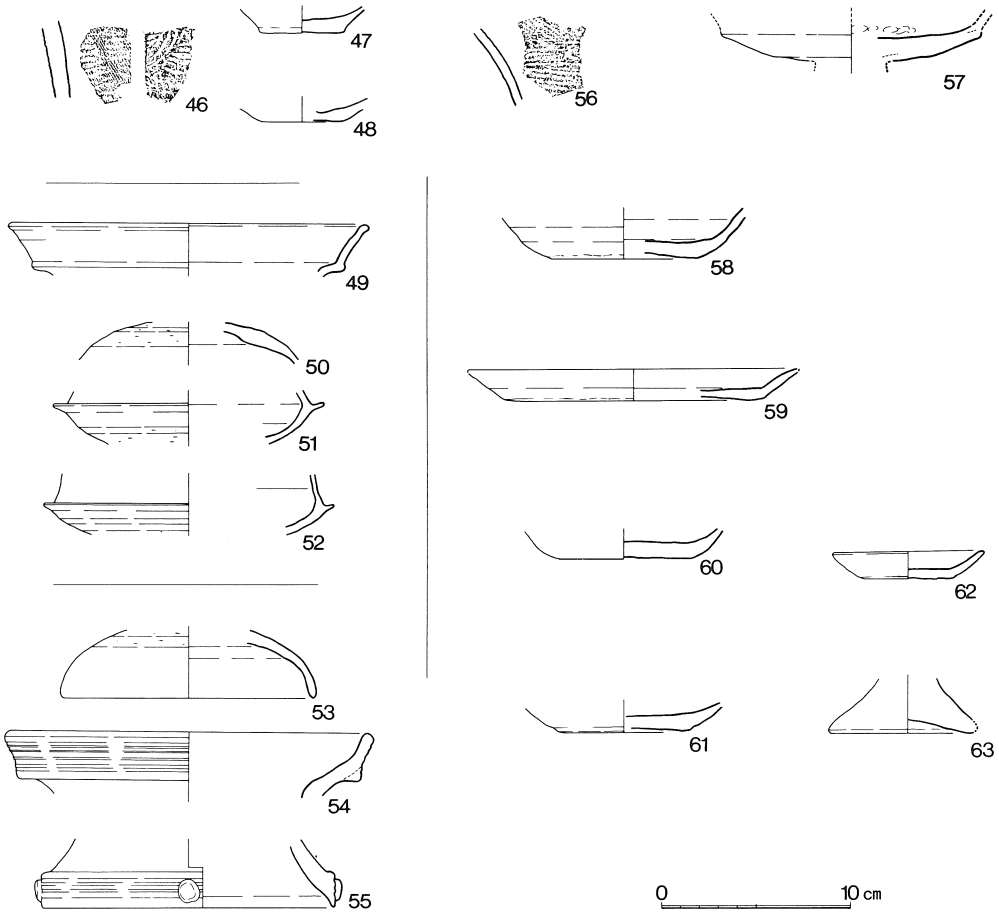


図26　南講武大日遺跡出土遺物（１）
（46；Ｇ１、47、48；Ｇ２、49〜52；Ｇ３、53〜55；Ｇ４、56〜63；Ｇ５）

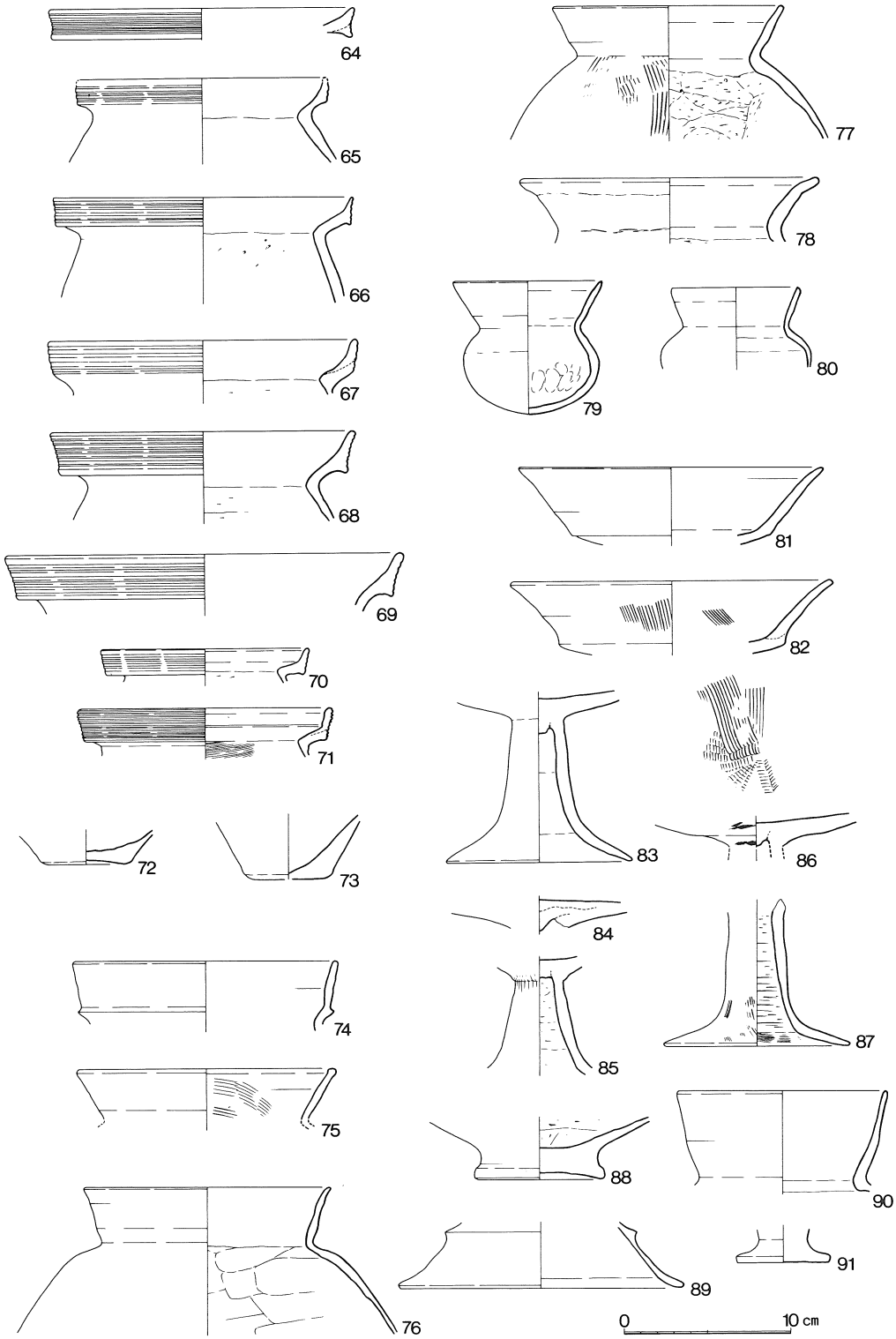


図27　南講武大日遺跡出土遺物（2）（第6調査区）

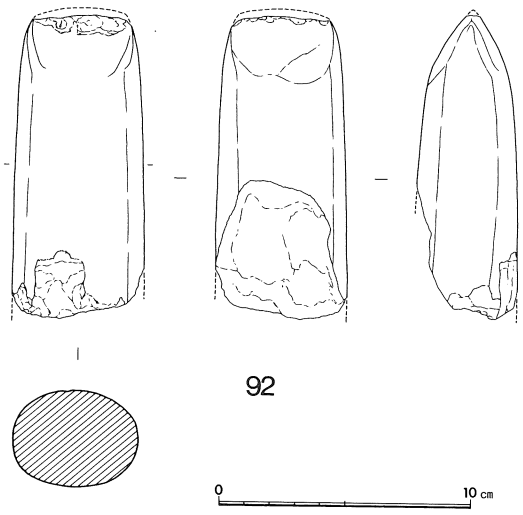


図28　南講武大日遺跡出土遺物（３）（Ｇ６）

は、大きく開く杯部をもつもので、やや長い脚柱部から大きく開く脚端部に至る脚部片もある。(89) は鼓形器台、(90) は壺の口縁部である。その他に器種不明の(88)、土師質土器で脚付の杯の破片 (91) がある。(92) は磨製の太型蛤刃石斧で、一部を欠損している。淡緑灰色を呈し、縞のある石材で作られている。

第７調査区 (93～97) この調査区からは弥生時代後期前葉の遺物が出土している。甕(93～95) は短く立ち上がる口縁部をもつもので、

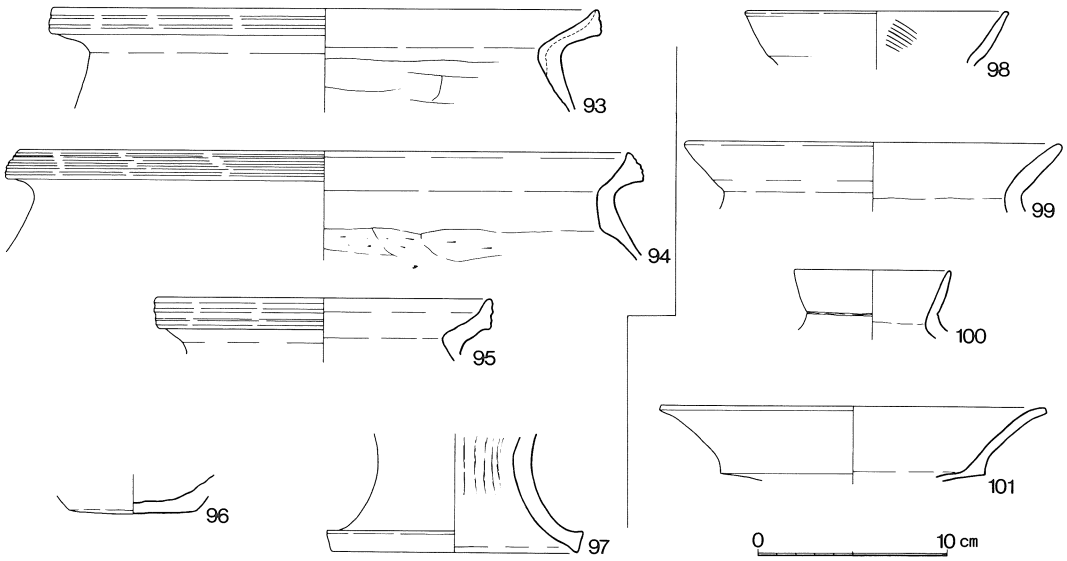


図29　南講武大日遺跡出土遺物（４）（Ｇ７；93～97、Ｇ８；98～101）

その外面に２～５条のヘラによる沈線がめぐらされている。(96) はこうした口縁に対応する底部であろう。高杯 (97) は、脚端部に平坦面をもち、脚内面にはシボリメをとどめている。

第８調査区 (98～101) 図示した遺物は段状の落ち込み内の土器だまりから出土したもので、この遺物の示す時期が同遺構の時期と考えられる。(98、99) が甕口縁、(100) は小壺の口縁部と考えられるものである。(101) は高杯の杯部である。杯身から底部にかけての屈曲に稜を有している。古墳時代の前半に含まれる遺物であろう。

Ⅳ. 周 辺 の 遺 跡

今回の分布調査事業では、南講武草田遺跡、南講武大日遺跡に南接する丘陵に所在する遺跡の資料収集を行なった。

表１　周辺の遺跡一覧表

番号	種　別	名　　称	摘　　要
1	散　布　地	南講武大日遺跡	住居址等。弥生時代～中世。
2	古　　墳	中尾谷山古墳群	前方後方墳１、方墳４（伝、箱式石棺出土）
2－A	古墳候補地		円墳１、方墳２の可能性がある。
3	横　　穴	清水の奥横穴群	５穴以上からなる。須恵器。
4	横　　穴	中尾谷山横穴	１穴。
5	墳　　墓	南講武小廻遺跡	石列を伴う墳墓。弥生土器。
6	散　布　地	南講武草田遺跡	弥生時代～古墳時代前期の包含層が埋没している。
7	条　里　跡	講武川流域条里制遺構	条里跡。

中尾谷山古墳群[10]

この古墳群は、講武盆地中心部を眼下に見下ろす丘陵の標高50～60mの尾根上に位置する。丘陵は北向きにのびる細い尾根をなし、この尾根上に５基の小規模な古墳が並んでいる。これらの古墳は尾根に直交する幅２～３mの溝を掘って墳丘としたものである。北端に位置する５号墳は、中尾谷山古墳とも呼ばれ、開墾の際に箱式石棺が出土したと伝えられている。

１、３、４号墳はいずれも辺10m未満の小規模な方墳である。

２号墳は全長17mの前方後方墳で、前方部を北に向けている。墳丘高さは前方部が1.5m、後方部が0.5mである。ただし、この古墳は方墳が２基連なるものの可能性もある。

この尾根の西側直下に清水の奥横穴群、東側直下に中尾谷山横穴が存在する。

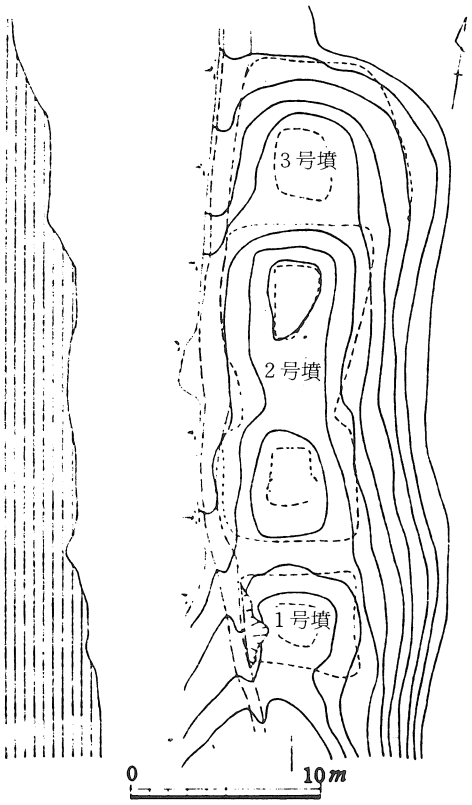


図30　中尾谷山古墳群測量図（注10文献より）

図31　周辺の遺跡（1／5000）

この尾根続き上方にさらに3基の古墳が存在する可能性がある。山道によってかなり現状が変更されているが、1基はやや大形のものの可能性がある。

清水の奥横穴群[10]

中尾谷山古墳群の位置する尾根の西側直下にある横穴群で、現在5穴が確認できるが、開口が古いうえ、崩落、剝落が著しく、現状をとどめるものは少ない。

5穴の横穴群は、中尾谷山2号墳の下から向かって左下方向に並んでおり、最も右に位置する1号穴、2号穴がドーム形の天井形態を呈する。2号穴からは山陰の須恵器編年Ⅲ期の須恵器蓋が採集されている。

4号穴は、やや縦長のプランを呈し、天井は擬似四注式のものである。

また、この横穴群下の傾斜地から須恵器が採集されている。これらの須恵器はⅢ期からⅣ期にかけてのもので、この遺物の示す時期が横穴群の時期にほぼ相当すると考えられる。さらに出土横穴は不明だが、輪状つまみの蓋、高台を有する杯、俵壺が出土している。

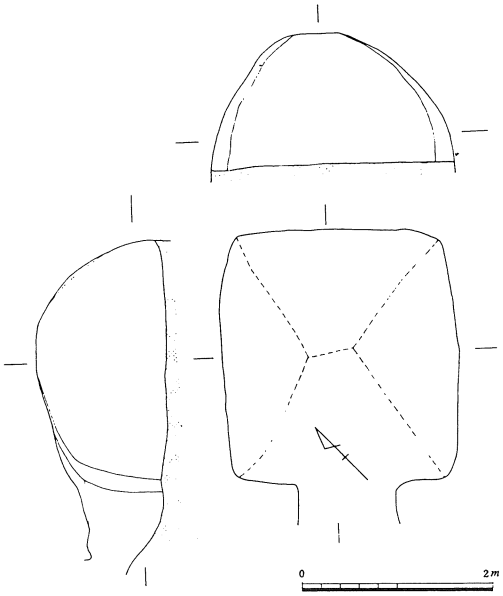


図32　清水の奥4号穴実測図（注10文献より）

中尾谷山横穴[11]

この横穴は、中尾谷山古墳群下の東側斜面に営まれたもので、現在は1穴しか確認されていないが、地形の観察によれば、群を構成するものと思われる。

現在確認される1穴は、やや縦長長方形のプランを呈し、天井は整正家形を意識するもののようである。軒線が段状に奥壁、側壁にめぐらされるが、棟線はない。

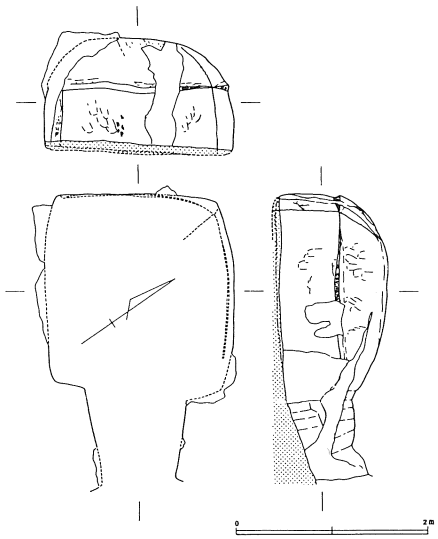


図33　中尾谷山横穴実測図（注11文献より）

南講武小廻遺跡[12]

この遺跡は、北側に講武盆地をのぞむ丘陵裾部に営まれており、水田からの比高は約3mである。狭い調査区内からは貼石状の石列が検出され、これに伴う古墳周溝状の溝を検出した。

石列は幅約１ｍで、残存高で0.7ｍを測る。石材は約45度の斜面に貼り並べられ、その下端で１列は平らに、さらに１列は浅い溝の内に立て並べている。使用される石材には偏平なものが多い。

この石列の西側が掘りくぼめられた周溝状の溝となっている。貼石はこの溝の立ち上がりの一面に貼り付けられた格好となっている。溝の幅は上端で2.6ｍを測る。

調査区内からは石列付近で壺、甕各１、溝内から肩部破片が出土している。壺はほぼ完形のもので、底部は石列の立石とレベルが等しく、石列に石のかわりに土器を立てていた可能性がある。これらの遺物は弥生時代後期末のものであろう。

この遺跡で検出された石列はごく一部のものではあるが、その並べ方や遺物は、四隅突出型墳丘墓に伴うものである可能性がある。

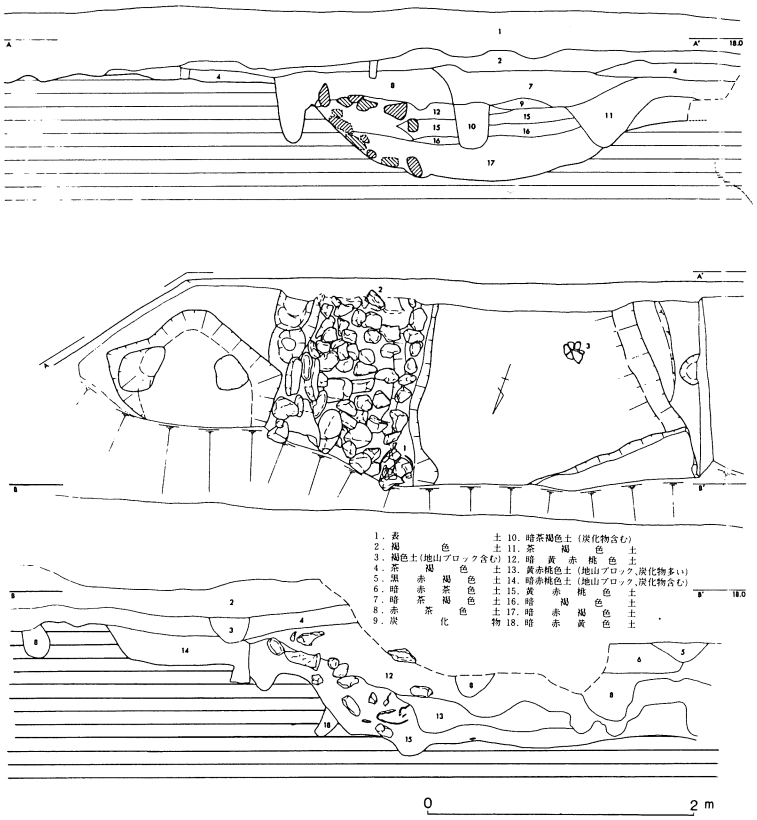


図34　南講武小廻遺跡実測図（注５文献より）

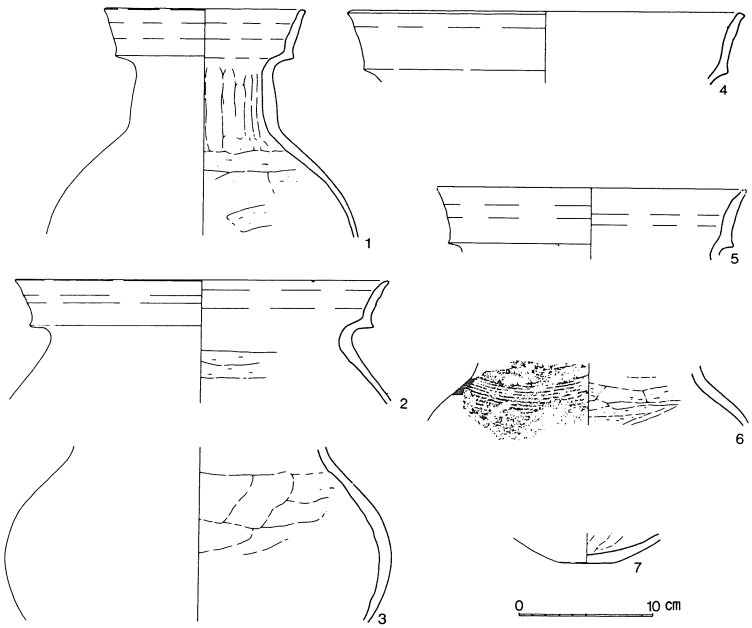


図35　南講武小廻遺跡出土遺物実測図

Ⅴ．小　　結

南講武草田遺跡では、包含層を検出した調査区と検出しなかった調査区があった。調査区と周辺の水田を等高線で表わしたものを比較すると下図のようになる。これによれば、包含層を検出した第２、第３、第５調査区は等高線がわずかに張り出してゆく部分に位置していることがわかる。一方、包含層を検出しなかった第６調査区は、等高線の最も内側に入りこむ地点に位置する。このことから、等高線の内側に入りこむ部分は南東の谷から流れ出す小河川の旧河道に、等高線の張り出す部分は旧河道沿いに形成された微高地に、それぞれ相当するものと考えられる。よって、包含層の時期である弥生時代後期から古墳時代前期頃にかけては、この微高地上に当時の生活の痕跡がとどめられ、現在は丘陵沿いに流路を変えられている河道は、この谷によって形成された扇状地形を縦断する形で流れ出し、講武川ないし中川に合流していたものと考えられる。

微高地上の包含層上面に堆積した砂礫は、この小河川が氾濫したことによると考えられ、さほど長期間にわたっては生活できなかったものと思われる。この洪水は、包含層に含まれる最も新しい遺物である古墳時代前期のものをもってその時期と考えることができる。そして、この洪水層以上では、遺物包含層はほとんど検出されておらず、この洪水を機に生活址は丘陵縁辺部や斜面に移動したことが予想される。こうした洪水は、単にこの盆地のみで起こったものとは考えにくく、他の

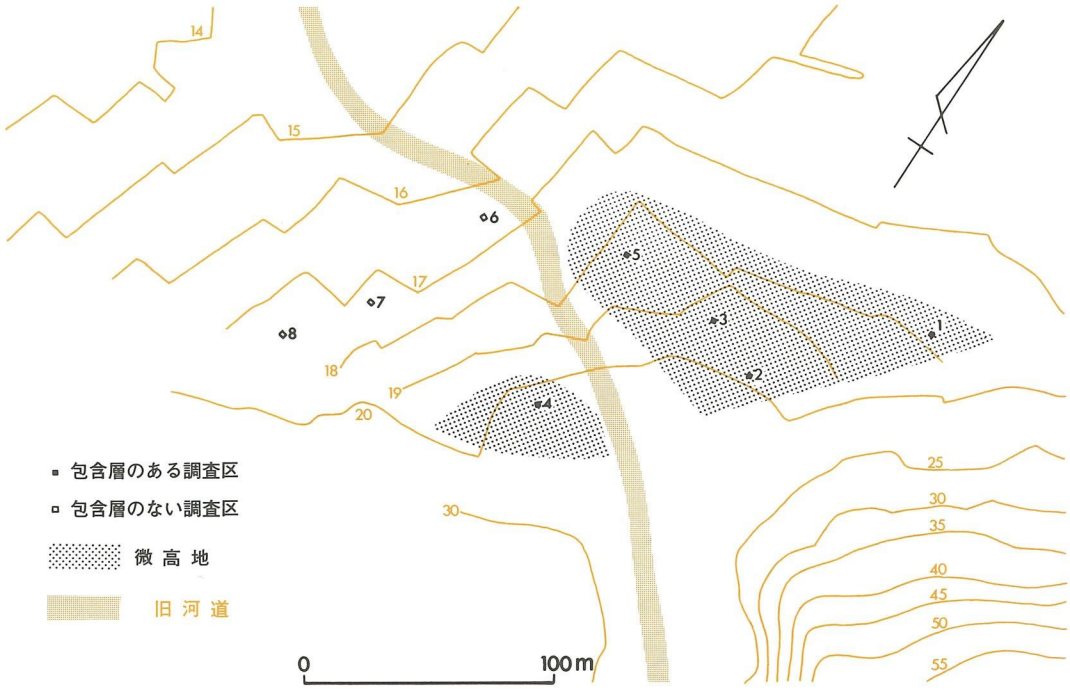


図36　南講武草田遺跡周辺旧地形復元模式図

同時期の遺跡でも検証される必要があろう。

また、現代の水田下でもわずかに高い地点には遺構が存在しており、当時（弥生時代後期～古墳時代前期）の水田は、現在のものよりかなり狭いものであることが判明した。その頃開発されていた水田は、講武川、中川沿いのかなり狭いものであったと考えられ、講武連田が現在のような姿を整えるのは、古代の条里制、中、近世の開発を俊ってのことであった。

南講武大日遺跡が立地する斜面は、なだらかな傾斜をなして降っており、居住するには好適な地点といえる。

この斜面からは弥生時代後期から中世に至る遺構、遺物が検出されており、広い時代にわたる複合遺跡であることが判明した。遺跡は集落跡と考えられ、竪穴住居跡と考えられる遺構は、狭い調査区ながらも７棟以上が検出されている。住居跡に時期を特定できるものは少ないが、弥生時代から古墳時代後期にかけてのもののようである。こうした住居跡のうちには、ＳＩ０５のように小規模な玉作りを行なっていたと考えられるものがある。また、黒色土の堆積、粘質土がつまった土坑（ＳＫ０１）など、住居跡以外の多様な遺構が検出されており、当時の集落の居住以外の多様な実態を窺いうるようである。

また、第６調査区で検出された成品の管玉や、第４調査区ＳＩ０１床面下検出の円形浮文を貼りつけた器台などは、この斜面に墳墓が存在することも予想させる。

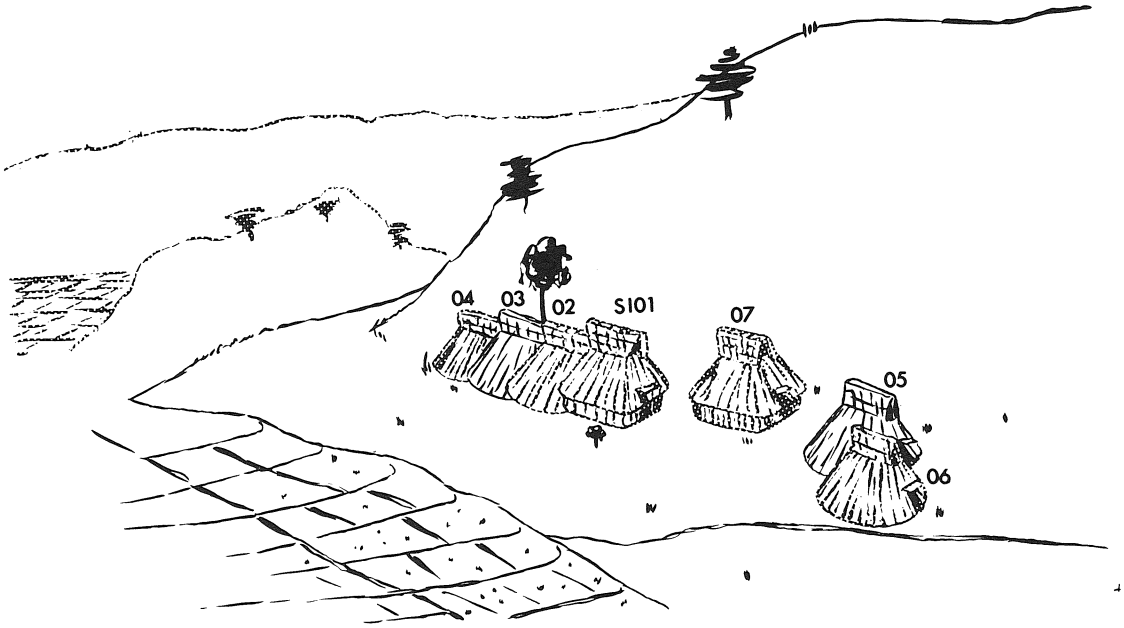


図37　南講武大日遺跡復元想像図

第５調査区ＳＩ０５を中心に行なわれていたと考えられる玉作りは、水晶や石英をその原材料とするもののようである。こうした石材を原材料とする玉作工房跡は、県下では松江市平所遺跡の弥生時代後期の玉作工房跡などごく少ない[13]。また、同様の石材は、第８調査区をはじめ、かなり検出されており、玉作りはＳＩ０５にとどまらず、この集落内の住居址を工房としてひろく行なわれていた可能性がある。しかし、こうした玉の原材料の産地は現在までのところでは判明しておらず、今後の課題である。

この斜面に立地した遺跡は、基本的に眼下の講武盆地の一画を水田として経営する集落と考えられ、さらに弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、農閑期に小規模ながらも玉作りを行う集落であったと考えられる。

注１．山本　清「佐太講武貝塚」（『講武村誌』　講武村誌刊行会　1955年）
２．山本　清「佐太前遺跡」（『講武村誌』　講武村誌刊行会　1955年）
３．『志谷奥遺跡』　鹿島町教育委員会　1976年
４．『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書１　名分塚田遺跡』　鹿島町教育委員会　1985年
『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書３　名分塚田遺跡２』　鹿島町教育委員会　1987年
５．「南講武小廻遺跡」（『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書１』　鹿島町教育委員会　1986年）
６．『奥才古墳群』　鹿島町教育委員会　1985年
７．『菅田考古』16　島根大学考古学研究会　1983年
８．『名分丸山古墳群測量調査報告書』　鹿島町教育委員会　1984年
９．山本　清「山陰の須恵器」（『山陰古墳文化の研究』所収　1971年）
10．『菅田考古』15　島根大学考古学研究会　1979年
11．注７書
12．注５書
13．「平所遺跡(2)」（『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II』島根県教育委員会　1977年）をはじめ、八束郡玉湯町の出雲玉作跡宮ノ上地区でもかなりの水晶の玉材が検出されている。玉作資料館勝部　衛氏の御教示による。『史跡出雲玉作跡－宮ノ上地区－第２次発掘調査概報－』　玉湯町教育委員会　1985年

大日遺跡第5調査区黒色土層の考古地磁気調査

－ 焼土？の判定と年代測定 －

島根大学理学部　時枝克安　伊藤晴明

大日遺跡第5調査区の黒色土層は、その上面が平でやや西に傾いており、約4m×6mの広がりと7cm～30cmの厚さをもっている。この層の土質は粘性が乏しく、下部の茶色粘土(地山)、および上部の粘土層（古墳時代中期の7号住居跡を含んでいる）と著しく異なっている。また、類似の土は近辺に無いということである[(1)]。この黒色土層は5号住居跡のプランで切られており、5号住居跡は弥生時代後期から古墳時代前期と考えられている。見掛け上、この黒色土層は焼土のように見える。今回の調査の目的は、考古地磁気法によって、この黒色土層が焼土であるかどうかを判定するとともに、もし焼土であった場合、残留磁気の方向を過去の地磁気の方向と比較して、焼土の最終焼成年代を決定することにある。

考古地磁気法の仕組

地磁気の方向は一定ではなく、時間が10年以上経過すると、目に見えて変化する。このようなゆっくりした地磁気の変化を地磁気永年変化と称している。一方、粘土が地磁気中で加熱されると、焼土は熱残留磁気を帯びる。この熱残留磁気の方向は、正確に、加熱を受けた時の地磁気の方向と一致し、再加熱されないかぎり、数万年程度の時間が経過しても変化しない。それゆえ、過去の地磁気の方向が時間とともにどのように変化したかをグラフにすることができれば、このグラフを〝時計〟の目盛盤として、任意の焼土遺跡の年代を推定できる。この種の〝時計〟では、地磁気の方向が〝針〟に相当し、粘土が加熱された時の〝針〟の位置を、焼土の熱残留磁気が記憶していることになる。日本では、西南日本における過去2000年間の地磁気永年変化曲線が広岡によって測定されて以来[(2)]、この方法が焼土の年代決定に実用的な役割を果すようになった。

試料と測定結果

図1に示すトレンチ断面から41個の定方位試料を採取した。採取範囲は黒色土層の広がりの端から端まで、厚みの上から下までにおよんでいるので、採取した試料の磁気的性質は黒色土層全体を代表していると考えられる。残留磁気の測定結果を図2に示す。残留磁気の方向が大変よく揃っているのが分る。一方、残留磁気の強度は比較的弱かった。このように土層の広範囲にわたって残留磁気の方向が一定方向に集中するのは、過去において、この土層が加熱されたか、あるいは版築のように一定方向の力で叩き締められたかのどちらかである。ここで、筆者等の版築の残留磁気の研

究によれば[3]、土層が叩き締められた場合、残留磁気の方向は水平に近くなることがわかっている。これに反して、測定結果はそうではない。したがって、調査を行なった黒色土層は焼土であると判定できる。残留磁気の方向が他のグループから離れている4例を省略し、残留磁気の平均方向と測定精度の目安となる数値を計算すると次のようになる。

平均伏角（Im）	49.8度
平均偏角（Dm）	8.5度E
Fisherの信頼度係数（k）	236.0
Fisherの95%誤差角（α95）	1.5度
試料の個数（N）	37　個

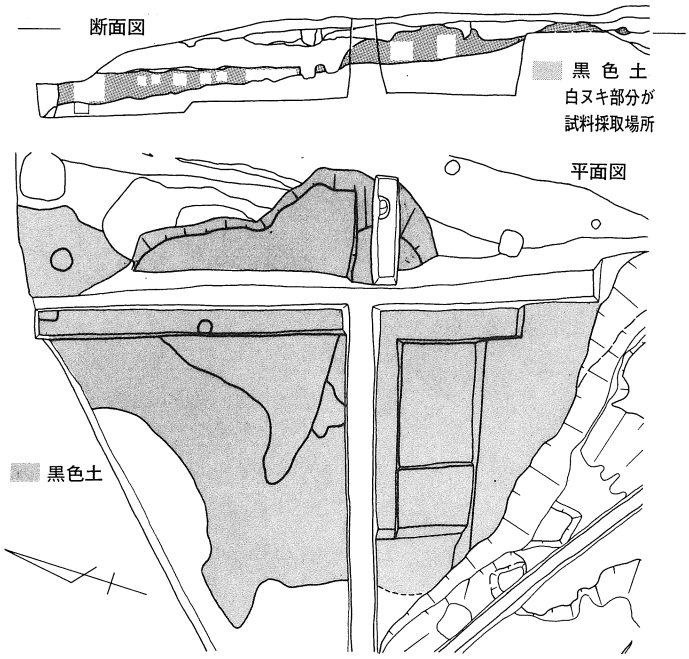


図1　大日遺跡第5調査区黒色土層の分布と試料採取位置

黒色土層（焼土）の考古地磁気年代

図2に黒色土層の残留磁気の平均方向（＋印）と誤差の範囲（点線の楕円）を、広岡による過去2000年間の西南日本における地磁気永年変化曲線とともに示す。考古地磁気年代を決めるには、平均方向から最も近い点を地磁気永年変化曲線上に求め、その点の年代値を読み取ればよい。このように、黒色土層（焼土）の最終焼成年代として、A.D.380±20とA.D.1345±10の二つの候補値が可能となる。しかし、初めに述べたように、黒色土層は弥生時代後期から古墳時代前期と推定される5号住居跡によって切断されているので、黒色土層の年代は古墳時代前期よりも以前でなければ

ならないが、二つの候補値はいずれもそれより新しい年代を示す。ここでは黒色土層の最終焼成年代としてより古い、

A.D.380±20

を採用する。なお、黒色土層は安定した地盤の上にあるので最終焼成後の土層の傾動は考慮しなくてもよい。

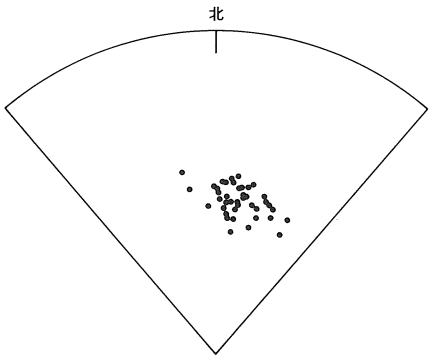


図2　黒色土層の残留磁気の方向の測定結果

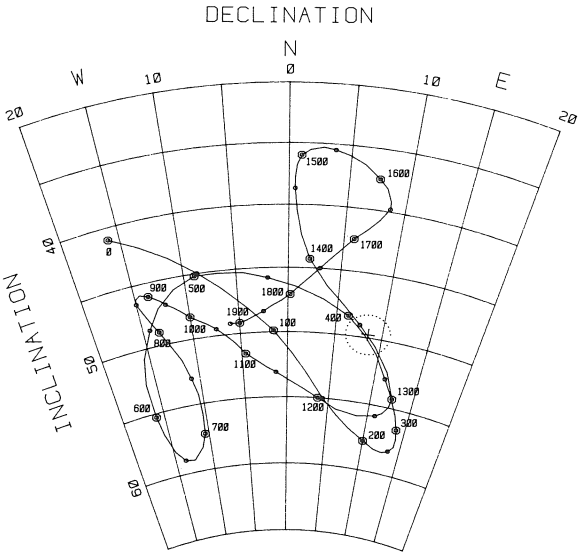


図3　黒色土層の残留磁気の平均方向と過去2000年間の西南日本における地磁気永年変化曲線

考古地磁気法を用いて、黒色土層は焼土であること、その最終焼成年代はA.D.380±20であることが判明した。A.D.380という古い時代に、ここで何が行なわれた結果、このような大きい広がりをもつ焼土ができたのか大変興味深い。

最後に、試料採取の便宜を図って頂いた鹿島町教育委員会　社会教育係　赤沢秀則氏と、試料採取にあたって協力してくれた島根大学理学部応用物理研究室四回生　松谷郁夫氏に感謝する。

注1．赤沢秀則氏からの私信

2．広岡公男（1977）考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向　第四紀研究15巻：p200～203

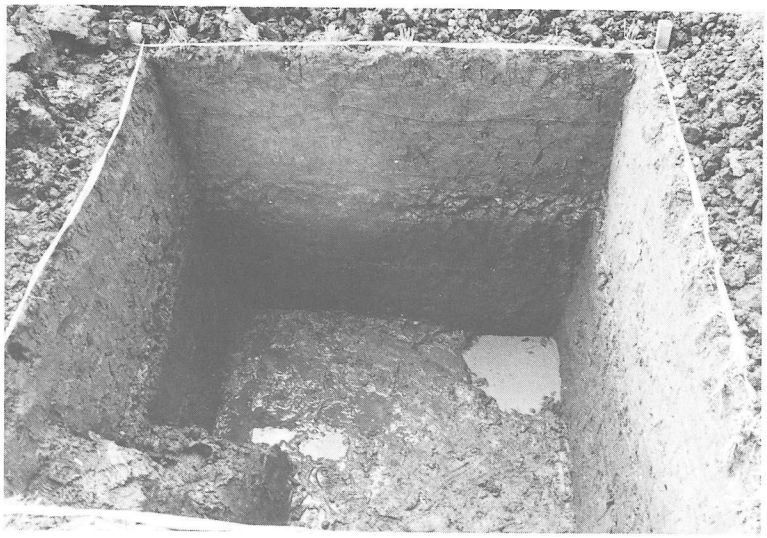
3．時枝克安（1985）寺院の基壇、古墳の墳丘盛土および銅剣埋納壙の粘土の応力残留磁気と寺院の基壇等の年代測定への応用　考古学と自然科学　第18号：p17～37

図　　版

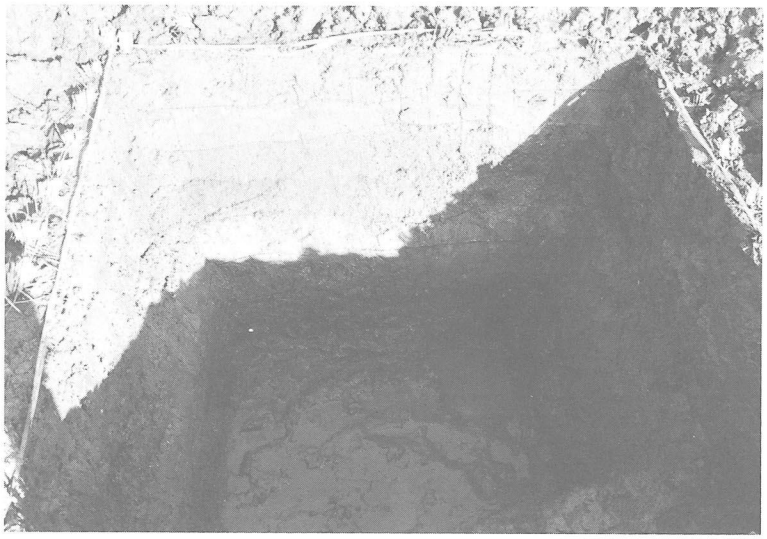
南講武草田・大日遺跡周辺航空写真

南講武草田遺跡全景（東から）

図版 2



草田・第 1 調査区



草田・第 2 調査区

草田・第 3 調査区

草田・第 4 調査区

草田・第 5 調査区

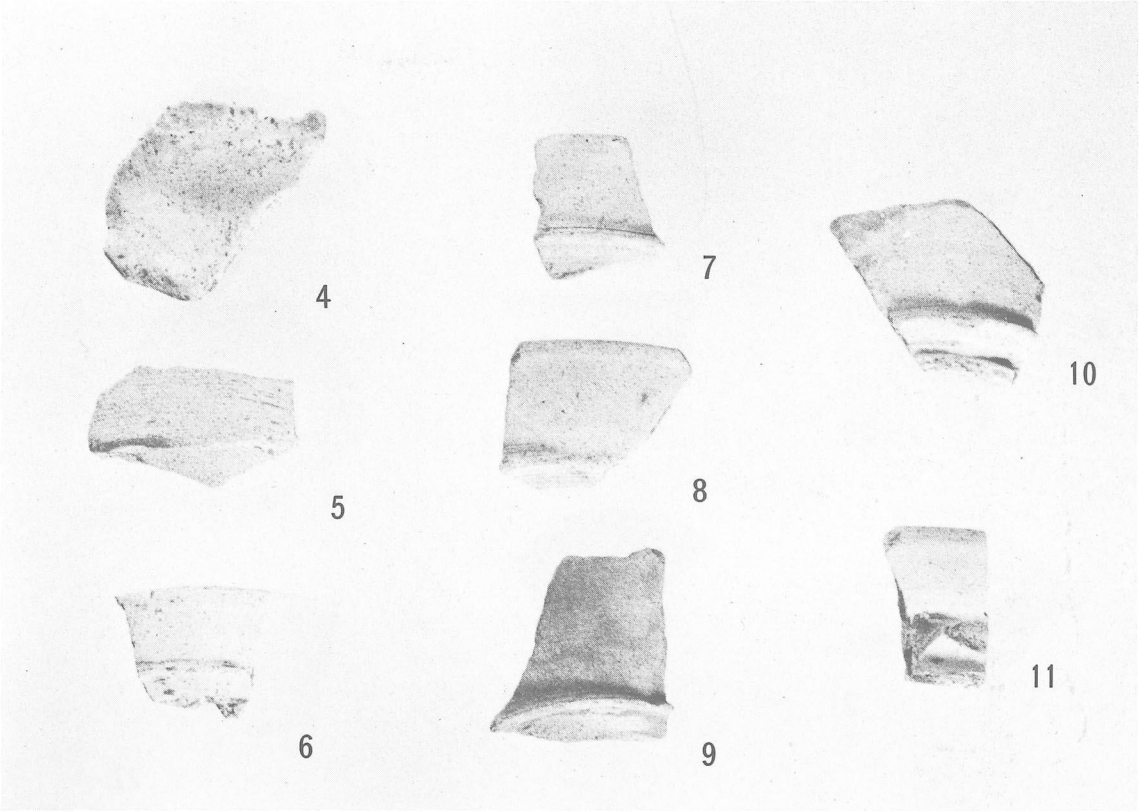
草田・第 5 調査区
遺物出土状態

図版 4

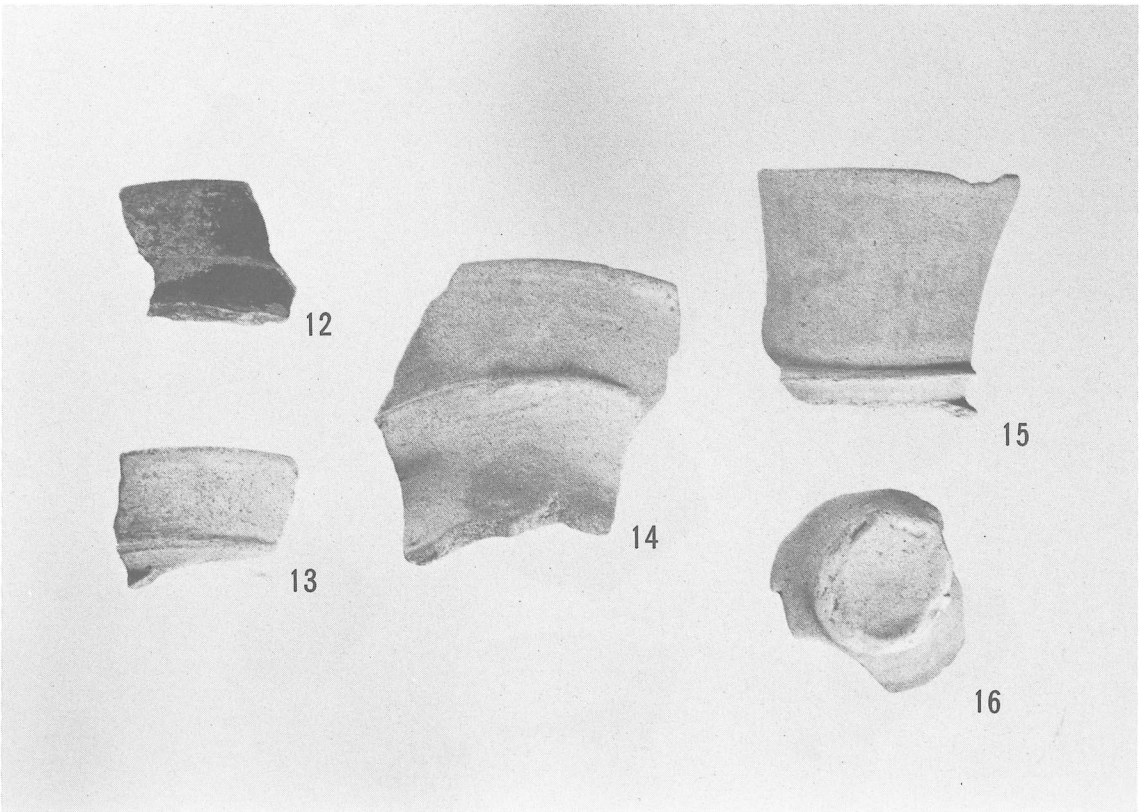
草田・第 6 調査区

草田・第 7 調査区

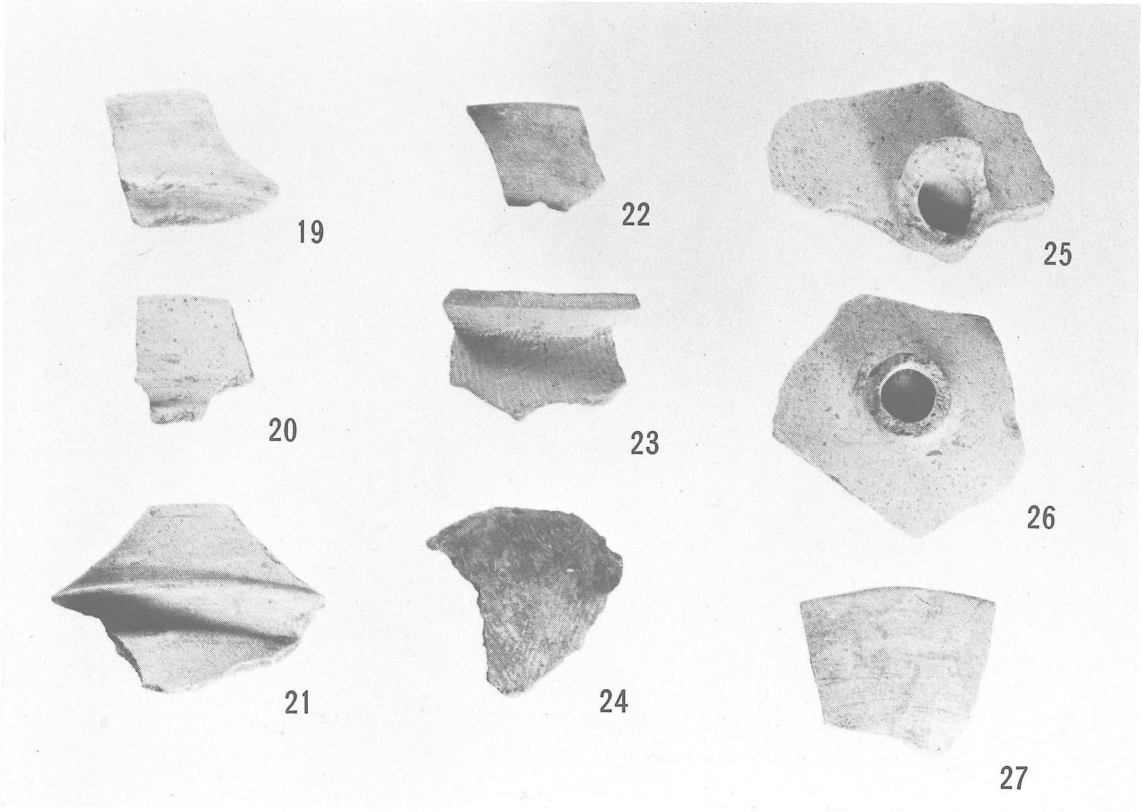
草田・第 8 調査区



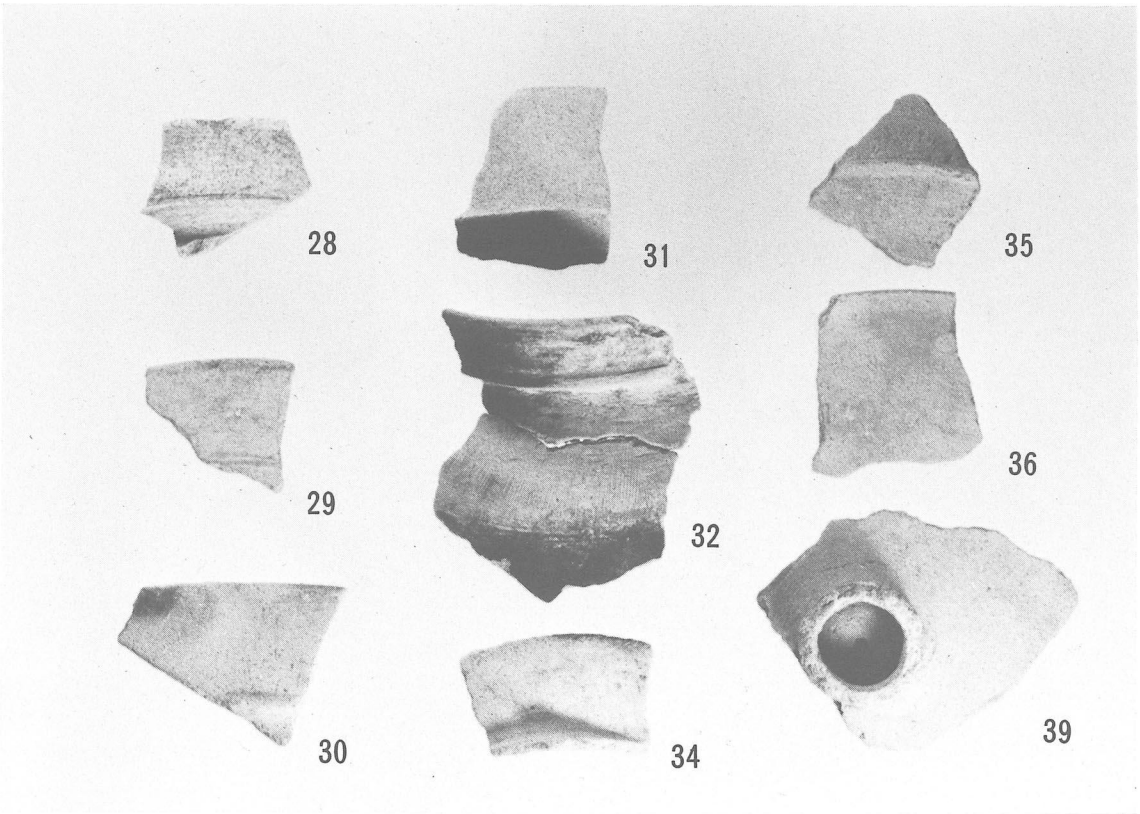
草田・第 2 調査区出土遺物



草田・第 3 調査区出土遺物

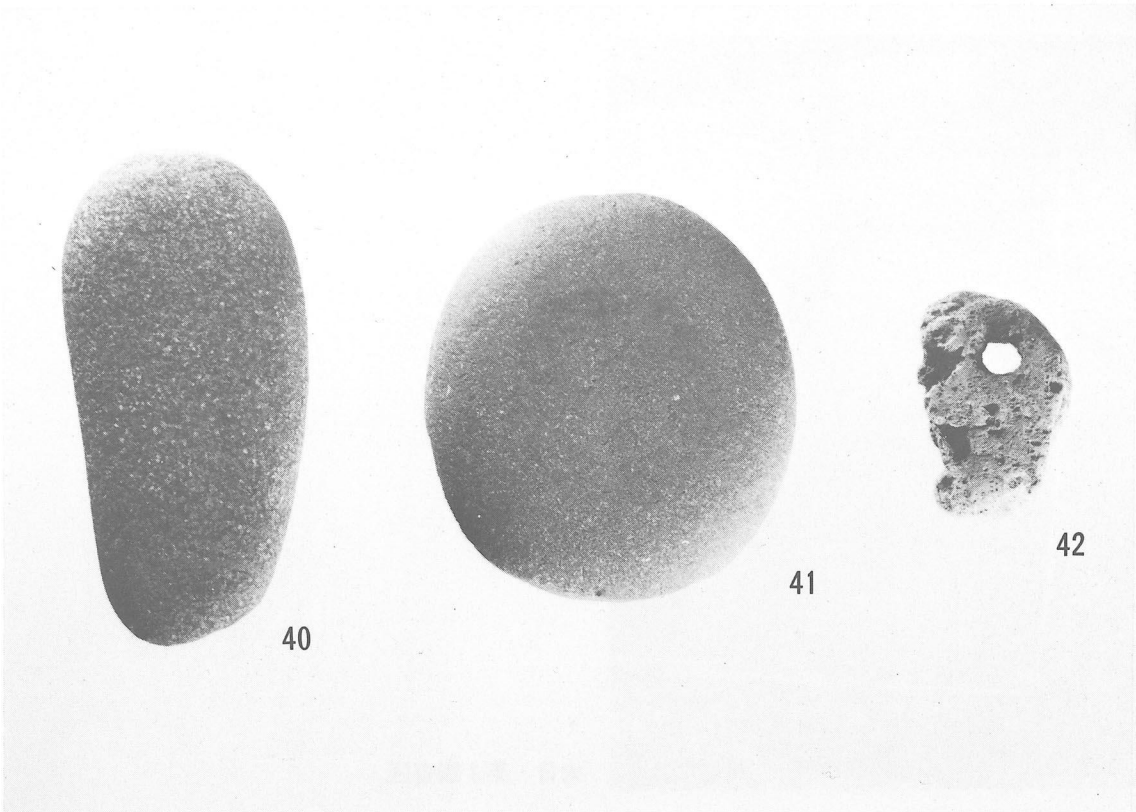


草田・第４調査区出土遺物



草田・第５調査区出土遺物 (1)

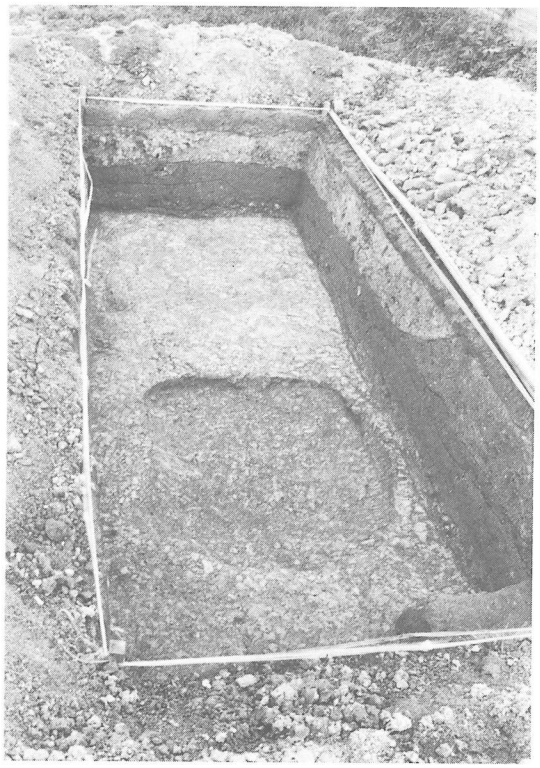
草田・第５調査区出土遺物(2)



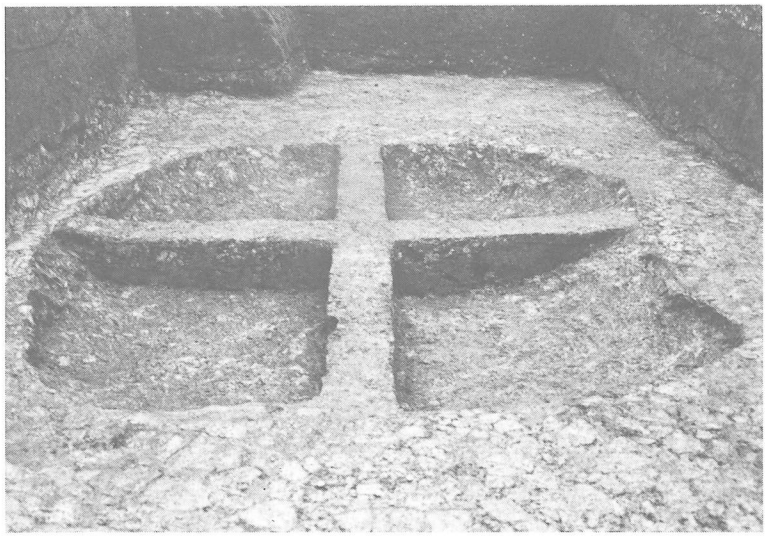
草田遺跡出土遺物

図版 8

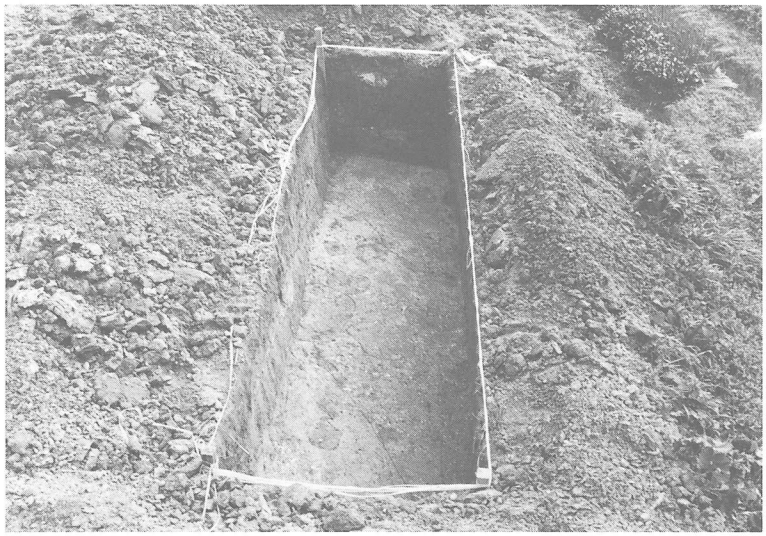
南講武大日遺跡全景



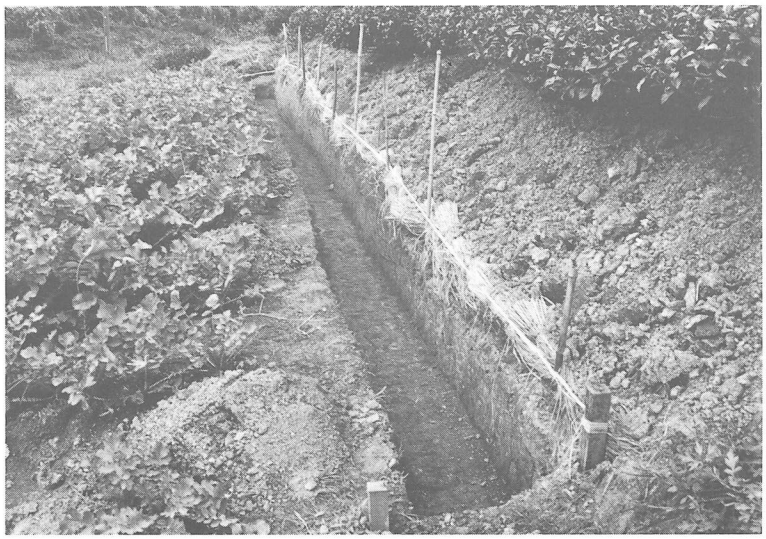
大日・第1調査区



大日・第1調査区
SK01土層

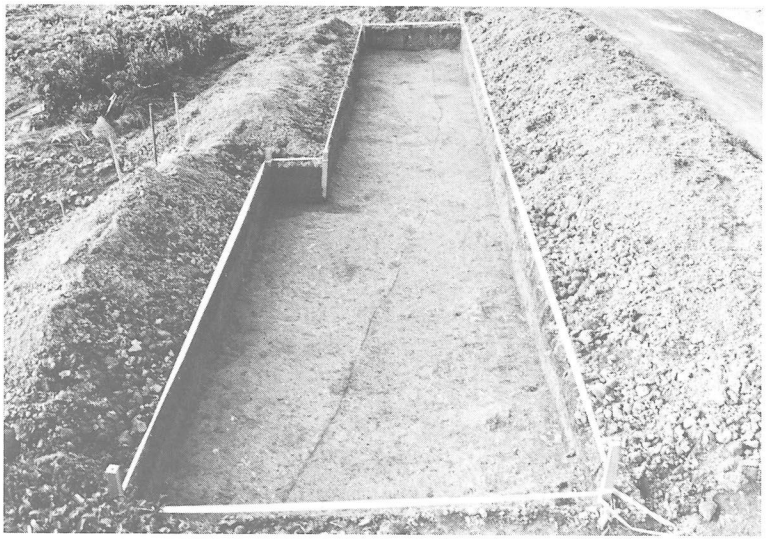


大日・第2調査区

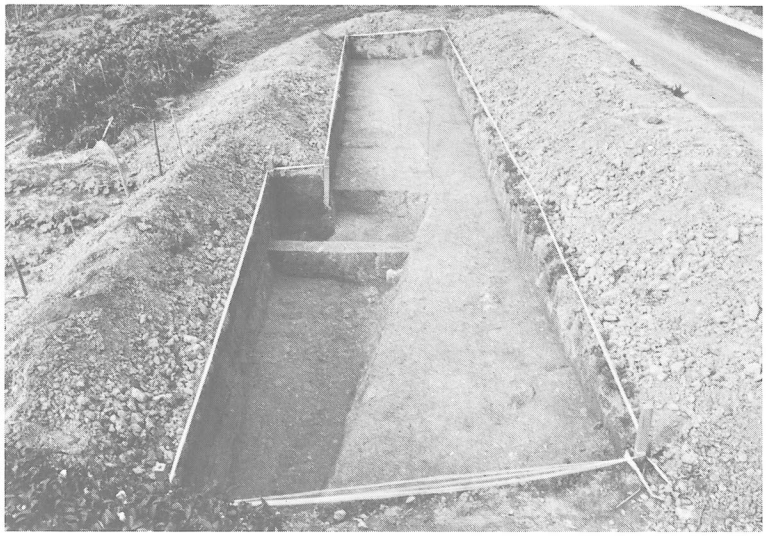


大日・第3調査区

図版 10

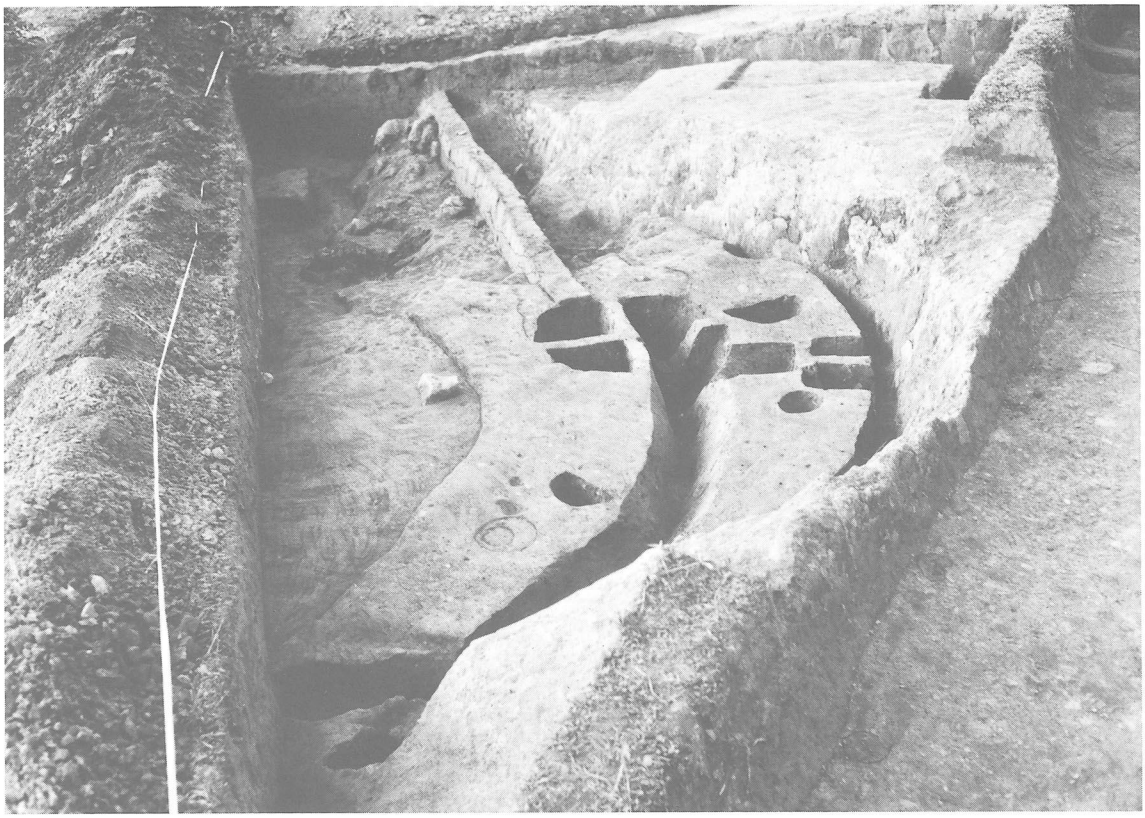


大日・第 4 調査区
遺構検出状態



大日・第 4 調査区
SI01

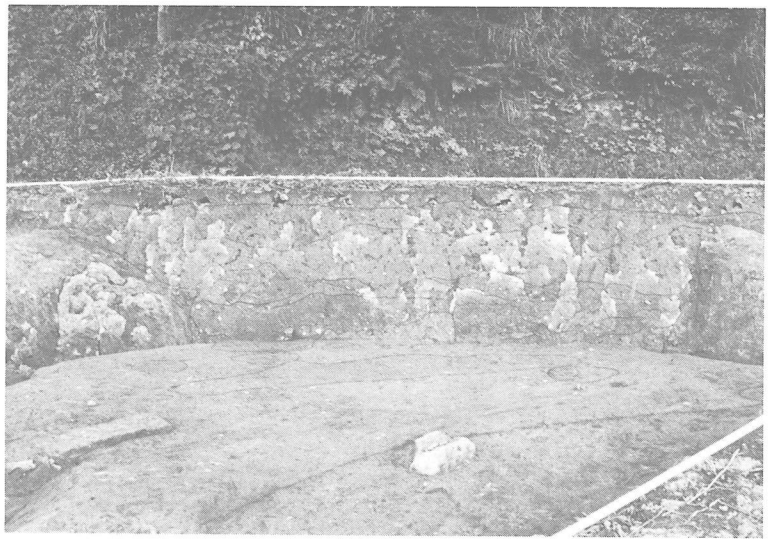
SI01鉄鋌出土状態



大日・第５調査区（南から）

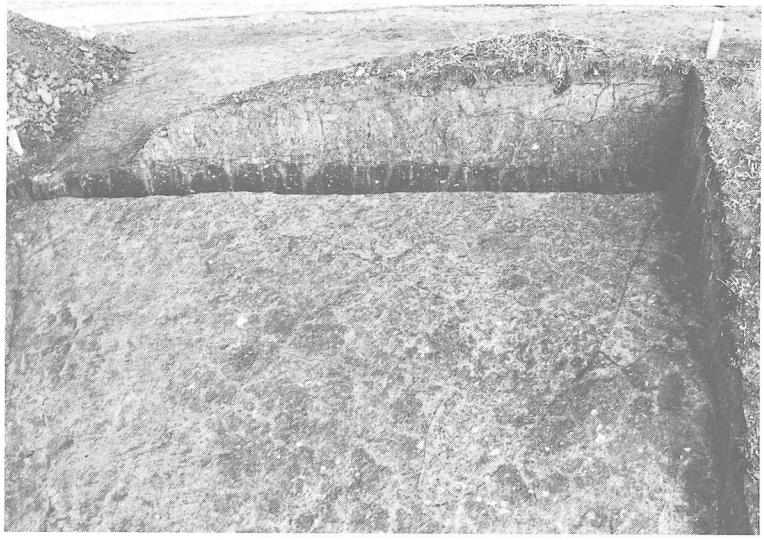
大日・第５調査区 SI05（北から）

図版 12



大日・第5調査区
SI05土層

黒色土の堆積



SI07

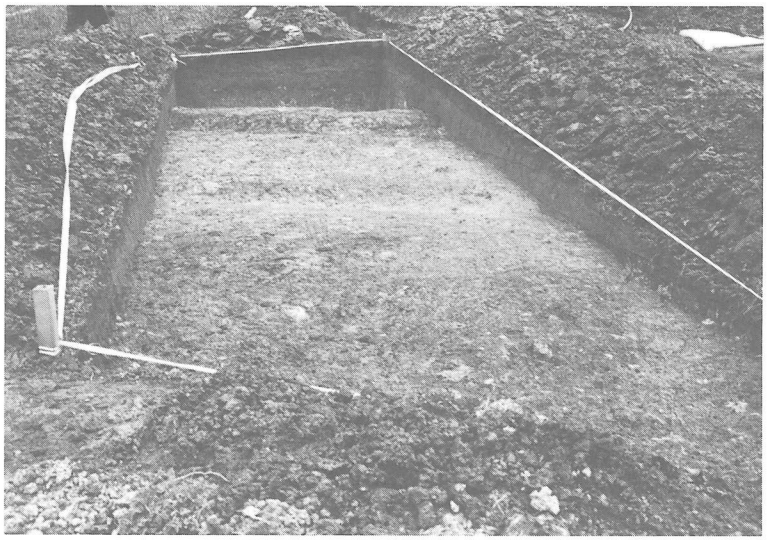
大日・第５調査区
溝状遺構他

大日・第６調査区

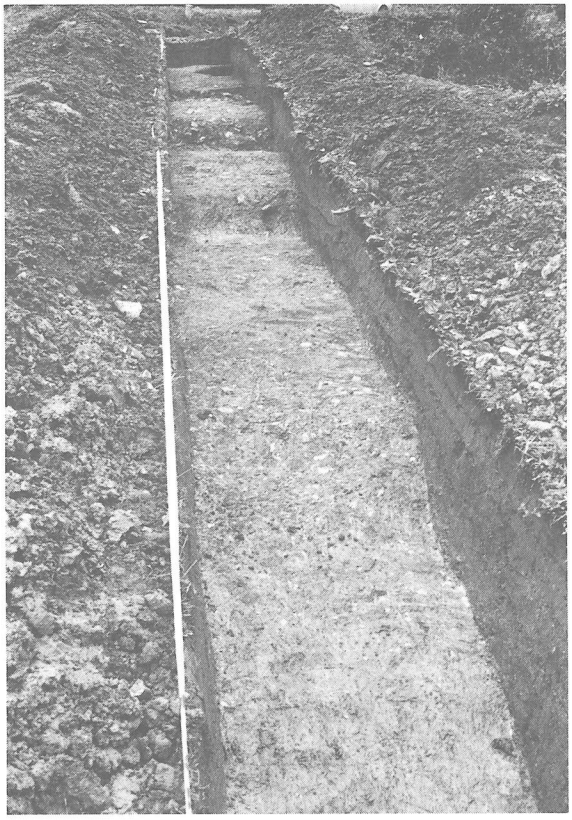
図版 14

大日・第 6 調査区
遺物出土状態

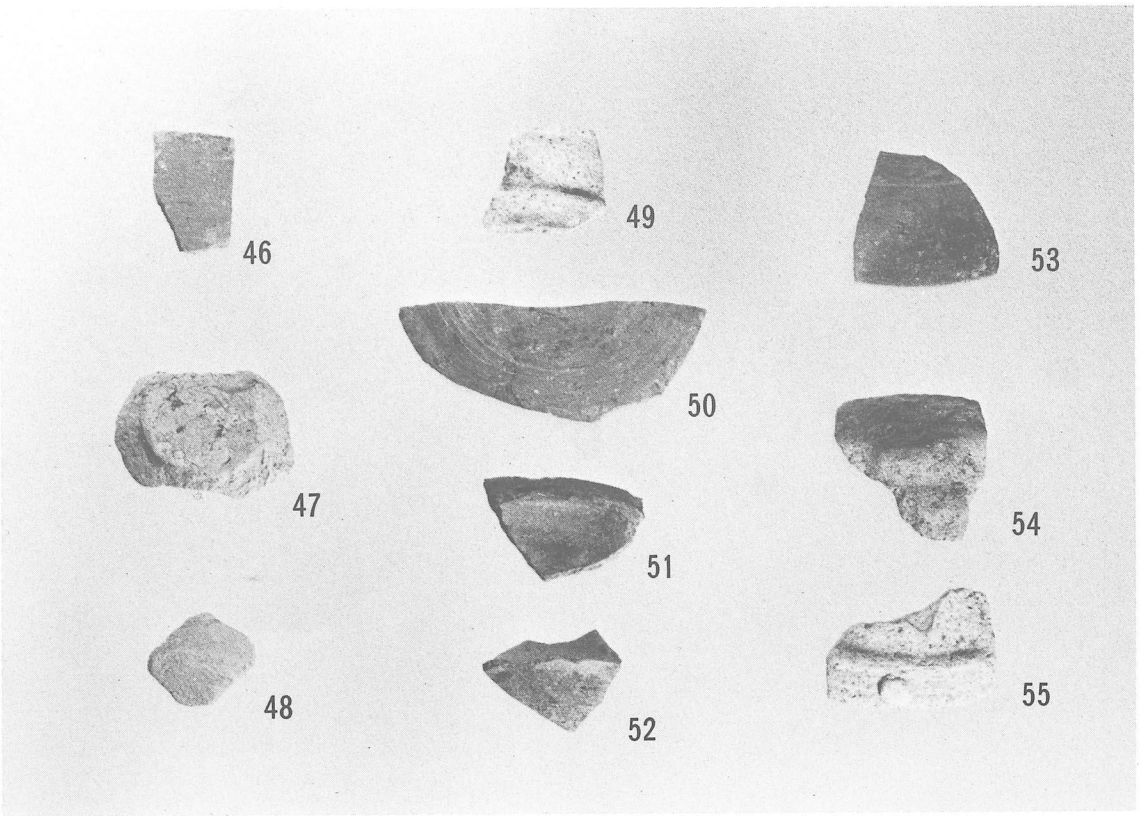
大日・第 6 調査区
管玉出土状態



大日・第 7 調査区

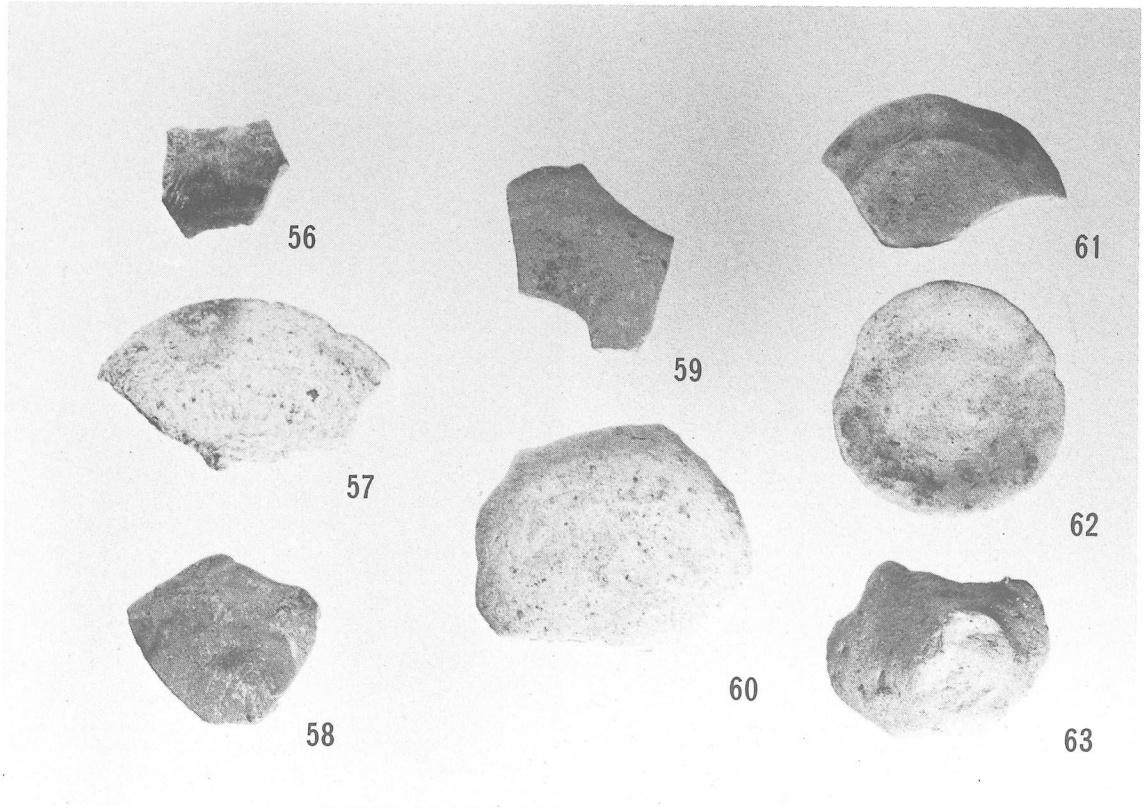


大日・第８調査区

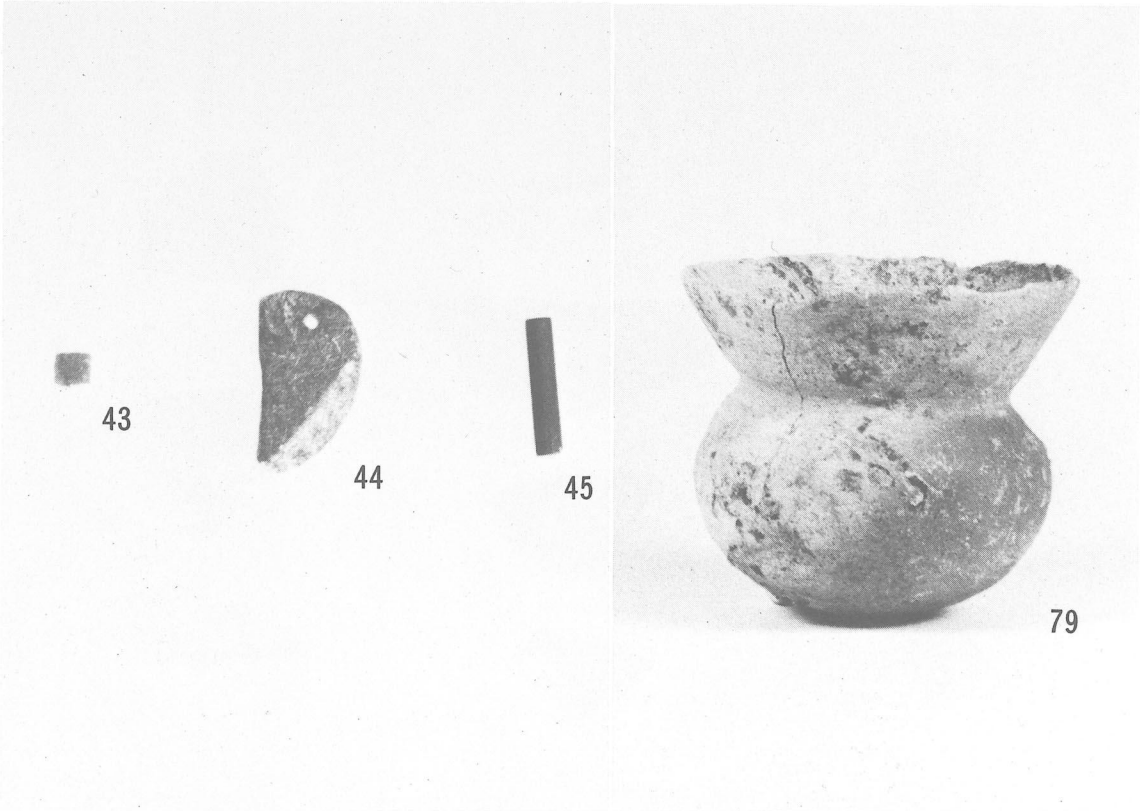


大日・第１～第４調査区出土遺物

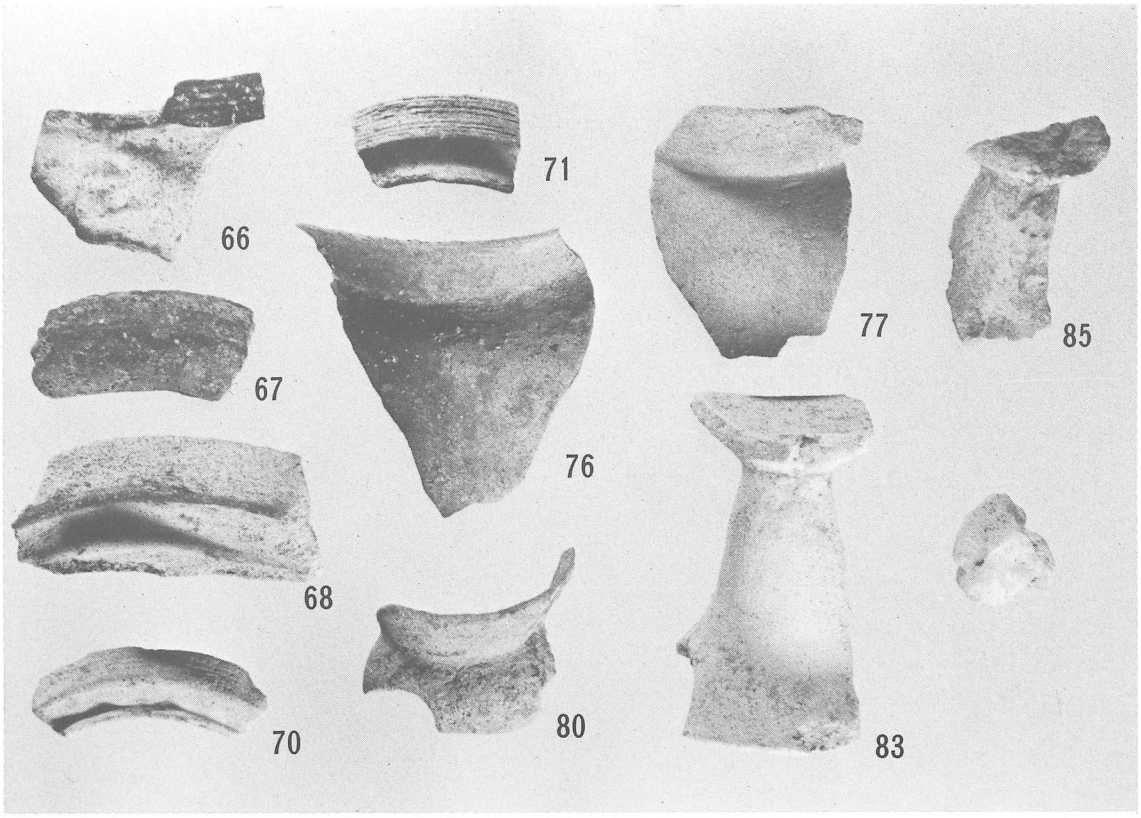
図 版 16



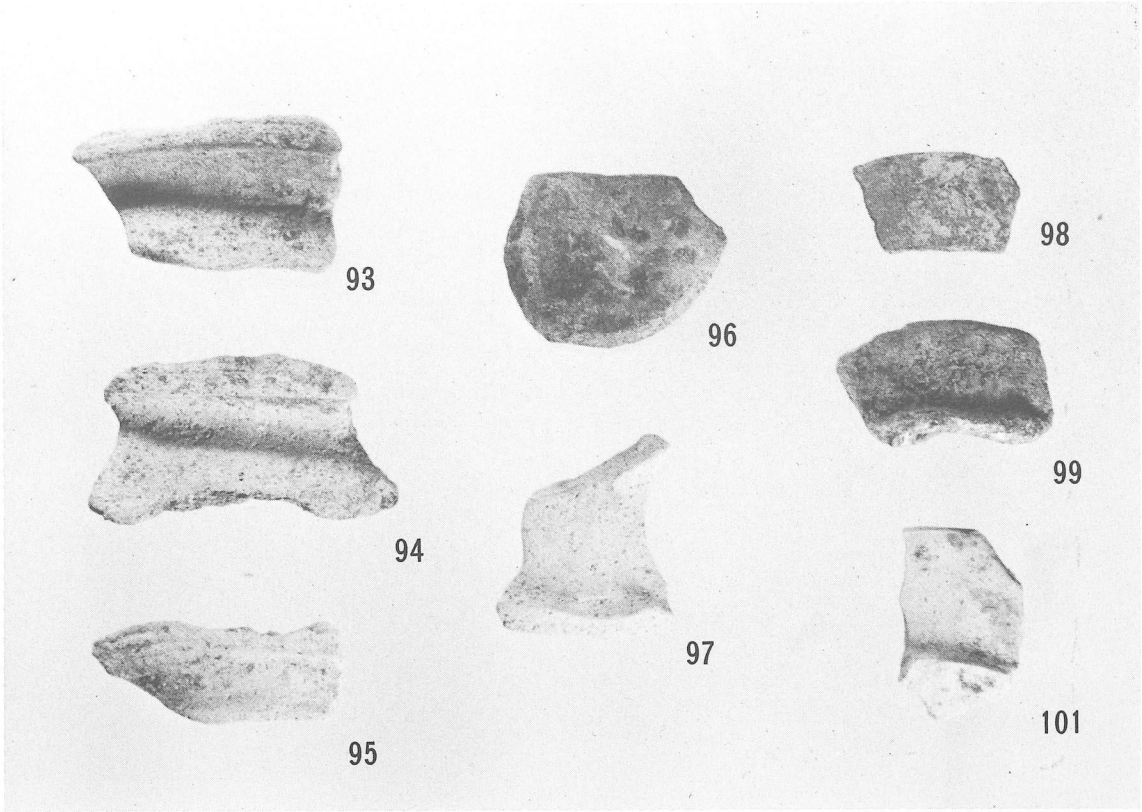
大日・第５調査区出土遺物



大日・第５、第６調査区出土遺物

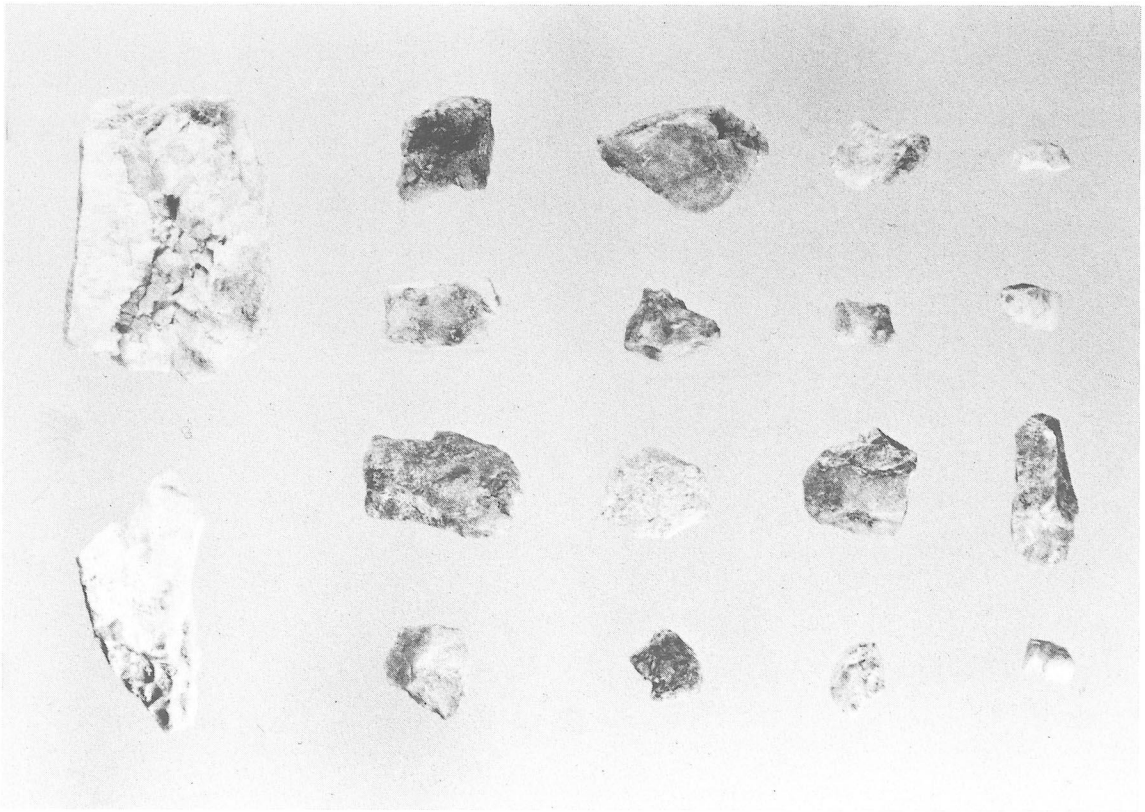


大日・第 6 調査区出土遺物



大日・第 7 、第 8 調査区出土遺物

図版 18



大日・第 8 調査区出土水晶、石英片

講武地区遺跡分布調査報告書 1
1987年 3 月

発行　鹿島町教育委員会
島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640-1

印刷　㈲ 黒 潮 社
松江市向島町182-3